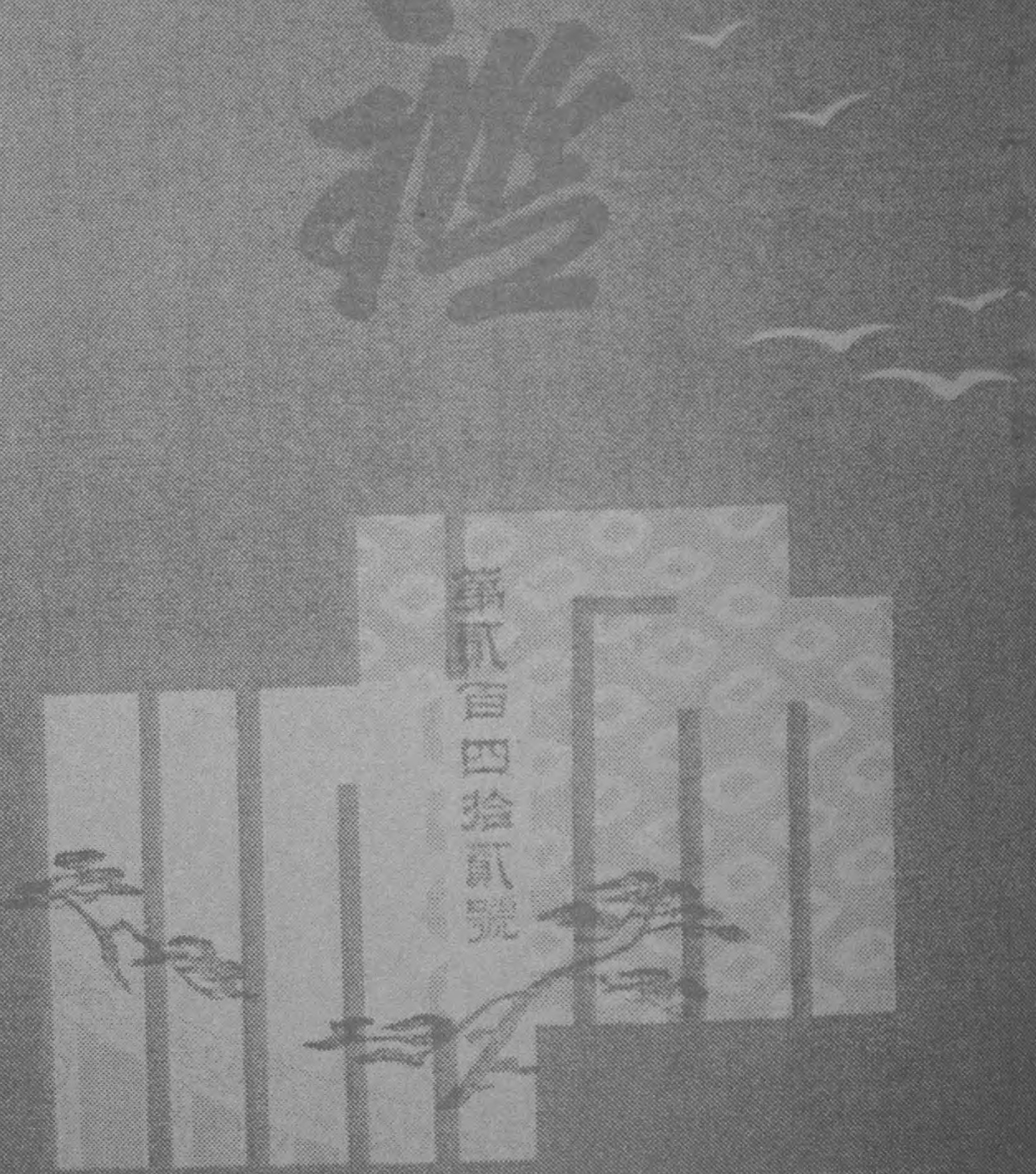
文藝



女鑑第貳百四拾貳號

目録

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十二月四日印刷
明治三十四年十二月五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞

印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地 並木良雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

發賣元 東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地 靜思館 (電話本局一千三百七番)

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に國光社とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず國光社女鑑編輯部へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社内

女鑑編輯部

稟告

本誌（女鑑）編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず女鑑編輯部へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず靜思館へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社内

女鑑編輯部

（電話新橋八十八番）

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地

靜思館

（電話本局千三百七番）

本誌定價改正

壹冊代金	拾錢
六冊代前金（三ヶ月分）	五拾七錢
拾貳冊代前金（半ヶ年分）	壹圓拾錢
廿四冊代前金（一ヶ年分）	貳圓拾錢

全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元　**靜思館**

月与高人本有
期挂簷低户映
蛾眉只從昨夜
十分滿漸覺冰
輪出海遲

芝英

船木大神　（高橋松亭畫）





裁斷　（岡倉秋水畫）

學藝と財產

所謂文明に心醉せる人々は、やゝもすれば、學藝に長け、あるは、多くの資產あるを以つて、文明の婦人と稱すめれど、こは、いみじき僻事なり。たとへ、是等の者は少きにもせよ、まことに、文明婦人たるの資格あれば、文明の婦人といふを得べし。彼の學藝、彼の財產、文明婦人ならしむる唯一の資格にあらざることは、識者を待たずして、猶、了知せらるべきなり。實にや、衣食足りて禮節を知り、學識ありて、事物を辨別する理性道理心生ずべしと雖も、若し、道德心なからむか、社界の一員として、吾が一身を保つべからざるのみならず、內に在りては家庭の平和を破り、外に出でゝは人と交ること能はず。ひいて、社會國家の秩序を亂し、その消長存亡に、密接の關係を有するや大なり。故に、文明の美名は、主として道德を標準とし、その發達の程度によりて付與せられざるべからず。從つて、憐むべき生活狀態をなし、目に多くの文字こそ解せざれ、最も、高尚なる道德的常識を

具へ、之を實踐したらむには、まづは、文明の婦人とやいはまし。身、富有にして、各種の事物に通ずるとも、その行爲、劣等野卑ならむには、いかでか野蠻の婦人といはざるべき。蓋し、道德學藝財産等、皆、文明の條件として必要なるは更なれども、自から、本末主從の區別あるを知るべし。果して、此の區別を了解して、是等を適當に我が身に備へたらんには、われ、之を眞正なる文明婦人といふに躊躇せず。言葉をかへていへば、文明婦人とは、重に德操全き者の謂也。即、高尙なる品性あるもの是也。昔、武家の婦女には、學藝なきも、尙、一種の嚴然犯すべからざる良風存したりき。されど、今の世に貞淑榮辱等の諸德を以て、自ら安んずるもの幾人かある。畢竟、敎育の不健全なると同時に、各人、比較的に道德の尤も重き事を、自覺せざるに基せずんばあるべからざる也。大に、諸媛の反省を促さゞるを得ず。

論説

女子の學問（算術）

岸田松二郎

算術といへば、學校教科の中に於いて、頭漿を搾るの學科と見做され、落第といへば、亦、此の科の不結果に源泉すと、いはるゝ程なる困事あるが故に、此の科を以つて、興味ありと思惟するもの、極めて稀少なるが如し、蓋し無味なるものは反覆するを厭ひ、乾燥なるものは習熟するを欲せざるは、人情の常なり。吾人々類は、實に、この弱點あるが故に、餘儀なき塲合を除くの外は、必ず、其の好む所に偏すること、恰も、水の卑きに就くが如し。之を以て、聖は益聖、愚は益愚となるものなれば、吾人は、常に、此の弱點を顧み、其の足らざる所を補ふの覺悟なかるべからず。

女子の最も得意とする所は、技藝にして、最、不得意とする所は、理論的學科なりとは、殆ど、一般の唱導する所なるが如し。果して然らば、學校教科の中にありて、及第落第を賭するの學科と見做されたる本科が、將來、如何なる稗益を與へ、又現時に於ける目的を定むることは、學校課程編制の主なるものなり。さて、此の學科は、普通學としたる價値と、專門學にしたる價値とによりて、同じからずと雖も、普通學として立てたる目的より、之を推敲すれば、日常の計算に習熟するを以て、第一主要目的となし、思考を精確ならしむるを以て、第二目的となすが如し。之を以て、高等なる普通教育にありても、第一目的と第二目的とを並用

して、互に、相戻らざる時は、則ち、思想を練磨すること精緻にして、實用を達すること敏活なるべきなり。

女子の特性として、論理的思想に短なること、果して世人の認むる所の如しとせば、精密なる思考を立て、秩序ある云爲をなさむことも、亦、其の短ならざるを得ず、思考を立つること粗笨にして、事を執ること不秩序ならば、焉ぞ能く、萬事を整齊し、圓滿統合せる室家をなすを得んや。女子の多くは、緻密なりと稱するにも拘らず、精密なる思想を要すべき算術家に短拙なりとは、甚だ、吾人の解せざる所なり。然れども、仔細に、其の然る所以を詮じ來らば、其の間、亦、一の理由なくんばあらず、女子の思想は、洵に精密なり。而して、論理的ならざることなきか。女子の觀察は、實に緻密なり。而して、概括的ならざること多し。算術は、誠に、其の思考を精密ならしむると同時に、論理的にして、之を概括せざるべからず。女子の短所、果して、論理的精密なる思想と、概括とにありとせば、奮勵數番、以つて、大に之を矯正せざるべからず。論理的思想と、精密なる思考の豐富なる丈、それ丈、事業の成功を全からしむるものにして、特に一家の事に膺り、萬事を統理して、四圍八面遺算なからしめむには、必ず、此の思想に待たざるべからず。裁縫の業たる、採りて以つて例證するに足るなり。今夫れ、一片の布帛あり、之を裁截して數片となし、片々相綴合して、遂に、一枚の衣服となさむに、其の組立を案じ、其の綴合を考へざれば、俄に、之が取纏めをなす能はざるなり。換言すれば、一枚の衣服は、即、論理的思想の産物なりといふべし。算術の科たるに、此の任を全ふするに足るものあれば、如何なる苦痛を

感ずると雖も、算術其の自らの、價値を詮ずるに及ばずして、思想練磨の材料となし、他日の望をこの科に待つは、決して、無稽の業にあらず。然れども、運算習熟なる第一目的を外にして、徒に、高遠に馳せよと慫慂するにあらず、世の第一目的にのみ望を掛けて、將來有望なる、第二目的を疎外にせんことを惜むのみ。亦、豈、他あらんや。

國語學につきて（承前）

（國語漢文專修會講演）

大宮兵馬

今日の文典は、平安朝の文學の盛なりし時の、上下四百年間の、歌文の中から見つけ出したものである。それは、本居宣長先生が、十三代の歌集の中から、規則を定められたる詞の玉緒や、富士谷成章父子の、足結抄や、頭挿抄などが、今日の文典の根本となつて居る。本居先生が、詞の玉緒などを書かれた氣勢は、先、一般の歌文をば、平安朝以上に、挽回せんとの企圖であつた。彼の支那の韓愈なども、舌を捲くばかりの事である。先生は、之を以つて、平安朝以後の文學を、律せんとの考ではなかつたのぢや。而して、本居先生以後に、先生が平安朝の詞を調べた如くに、平安朝以後の言語を、調べた學者が一人も居らぬ。殊に、今の教科書の文典は、英吉利文典や、佛蘭西文典の規則を持つて來て、わが平安文の言語を並べたものである。換言すれば、煉瓦製造の建物に、日本風の古物を陳列した樣なものである。かゝる文典を以つて、この今日の言語を支配せんと思ふのは、根本が間違つて居る。文典の何物なるかを知らぬのである。本居先生の慨ありて、今日の言語

をも平安以前に繰りあげて、改良せんとするものあらば兎に角なれども、この變遷の跡を追ひて、現在に普通の言語を一定し、普通文を統一せんとするには、明治時代に於ける、新文典が定まらねばならぬ。近い時代の言語から、標準を取らねばならぬ。斯ういへば、直に、贊成する人が多いに相違ないが、其の文典の規則を組み立つるが、甚だ六ヶ敷のである。

兎角、今日の國文家には、斯ういふ僻見がある。平安時代の文典には合はぬとも、奈良朝以前の語あらば、古い言語であるから、神聖侵すべからざるものとして、その謬を指摘せず、鎌倉以後の言語ならば、少し違へるが如きものあらば、自然の變遷をも攻究せず、直に、之を謬とし、間違として、改め正すを常とする。これが、實に可笑しき事である。今日の言語に對して、上古の、古事記、祝詞の樣なものを持つて來れば、其の中に、百に六十位は使はぬ詞がある。今の世の人には、外國語を聞く樣な感じがする。これが、二千年又は三千年前の、吾等が先祖の常の言語であつた。これ等の言語から、時勢と共に段々遷り變つて、今日の言語となつたものである。故に、奈良朝以前の言語が、神聖なるものならば、鎌倉以後の言語も、經過すべき順序を踏みて、變遷し來つたものは、決して、平安時代の文典には間に合はぬとて、間違とはいはれぬのぢや。

されど、茲に、全く一種の謬といふものもある。いかなるものがその誤かといふに、右の自然の順序を經過せず、特別の事情から來れるものがある。これが全く誤である。林道春のつけた四書五經の訓點は、大底、國語の語路にも合ひて、正しいものである。山崎點とか、後藤點とかいふ

ものは、言語の自他をも、時をも思はず、成るべく、手爾波をも減す樣に訓むことを務めた。明治の初めから、日本外史や、日本政記は、人心を皷舞するに宜しいといつて用ゐられた。ところが、その本が無點であつたから、田舍の學者が勝手にこじ附けて讀んで、此等が、言語を傷くることゝなつた。又、明治になつてから、漢文も國語も知らずに、唯、西洋の言語に少し通じた者が、奇妙の直譯をした。原文の直譯では、暫く斯ういつておけど、その意味は、斯うであるといふ樣に、譯語調といふ一種の者が出來た。これ等が、追々に、普通語の中にも混ずることになりて、また、今日に至りては、文章も、其の語氣が混入することゝなりて、その爲に、我言語の、眞正の發達を妨げたものである。文章の進路を妨害したものである。今にして國語の改良を計るとすれば、さういふものは、先、常の言語からも、文章からも、除かねばならぬ。山間僻地の者の言語には、却つて、これ等の弊がない。それは、その通俗の語が、自然の通筋を經て變遷してあるからだ。今日にして、言語を改良せんとならば、先、上古の文章から、經過して來た道筋を考へ調べて、今の俗語に於ける文典を定めて、普通の標準を立て、それによりて、文章をも書き、段々、年と共に一定し、發達せしめて行かねばならぬ。この事は、一二人の手では出來ぬ、同志の者が、數多あつまりてやらねばならぬ。國民は、その義務として、之を助けねばならぬと思ふ。

それから、專門家の事業につきていへば、まづ、專門家は、太古以來の言語を、能く解釋する事をつとめねばならぬ。一般の人民は、薩摩の果から、北海道、臺灣まで、今日の普通語を融合せしめん

と計るにて宜しいが、專門家は、溯つて、十代、二十代、三十代の前、千年、二千年、三千年の前の人と、話をすることを勉めねばならぬ。併し、古來の歌や、文章を研究するにも、時代を分つて研究せねばならぬ。それには文學史があつて、其の時代々々の事を知らしむるけれども、私の見込では、字引にも、時代々々の言語を分けて、委しく、記したものが出來ねばならぬ。平安時代の言語には、雅言集覽といふやうなものがあるが、各時代に、かやうなるものがなくてはならぬ。鎌倉時代のも、徳川時代のも、溯りて奈良朝以前のも、時代に分けて、辭書を作らねばならぬ。また別に、一般の人民の使ふべき、普通の辭書も作らねばならぬ。今日の國語學者は、此の後、嚴肅に考へて、斯ういふ所に目をつけて、從事すれば宜いと思ふ。又、專門家の爲には、各時代の文典が必要である。これも、先、其の時代毎に言語の法則を規定し、成る丈細かに、その本末を示さねばならぬ。而して、わが文章言語は、神代以來、如何なる節を通りて、今日迄流れきたものであるかと、いふことのわかるものでなければならぬ。今日の文學史には、まだ、私の希望する様なものはない。私の希望のは、應神天皇様以前の我國の言語は、如何なる所から生れて、如何に發達してあつたか。漢字が渡つてから、如何なる影響を受けたか。それが表面上には、どういふ風に現れたか。佛教が渡つてから思想上に、どういふ變化を受け、又、言語は、どうなつて來た。敎育殖産等の事業に伴ふて、わが言語の上には、如何なる影響を及ぼしたものであるか。と、微細に入りて、研究せねばならぬ。又、立戻つて考へねばならぬ。純粹の日本語のみなりしならば、如何に進歩せしか。

今日より立派になりたらんか、否か。と、いふ事をも考測して見ねばならぬ。又、外國の言語が來たは、わが言語の爲になつたか、どうだかと調べねばならぬ。大凡、かやうに取調べたならば、今日は、多くの外國語を、進んで取つて居るけれども、この次の時代には、未來の國語は、いかに發達するであらうか、如何に妨害せられんか。と、考ふべきである。此等の事を取調ぶる事は、專門家の事業である。

此等の事業に就いては、他日御賛成を願ひ、直接に、間接に、御助力を願はねばならぬ事であらうと思ひます。

今日は、聊か、平生思ふ所を申しましたるのみで御座ります。

（完）

精華

日本女訓（未定稿）

川崎重陽

三十九、小兒の養育の上に、最、重んずべきは家庭の和合なり。睦しく和ぎて、のどかなる春の日の如き家庭には、幼兒も、おのづから、のびのびと、素直に生ひ立つべし。もし、家内に、和氣乏しくば。荒野に、苗を栽ゑたらんが如く、いかに、手を盡すとも、そのかひなかるべし。

四十、厚く、庭訓を重んじて、かりそめにも、忽なるべからず。小兒の發育の度をはかりて、ほどよく訓へ導き、素直に生し立つべし。生ひさ

きのよしあしも、この二葉の時にわかる丶なり。姑息の愛におぼれなば、かへりて、子をそこなふに至らむ。

四十一、世に、継子ほどあはれなるものはなかるべし。己がうみの子の愛くしさを推しても、なき父母の心を思ひやりて、我がうみの子よりも、一層あつく愛養すべし。たゞ、己が愛情に不足なくば、なつき親まぬ子のあるべき理なしと知るべきなり。

四十二、祖先の霊祭をば、叮寧に営み、前代の遺物をば、大切に保存し、一家親族のしたしみを厚くし、時々の音問、往來をも欠かざるべし。又、祖先の嘉言、善行、勳績をば、をり／＼、兒童に語り聞せて、之に則らしむべし。これ、何よりの教訓なり。

四十三、上に述べたる條々を、厚く、心にかけて履み行ひなば、おのづから、よき家風もたちて、慶多かるべし。これ、まことに主婦たるものの、つくすべき本分なり。もし、家風善良ならざらんには、主婦の責任立たずと心得べし。己の責任を全うするこそ、女子たるもの丶面目なれ。

四十四、およそ、婦徳は、貞操より重きはなし。貞操とは、一たび嫁ぎては、畢生、その夫につかへて、二心なきをいふ。婦徳は、柔を主とすとはいひながら、まだ、梅花の氷雪をしのぎて馥ばしきが如く、犯すべからざる節操なかるべからず。この節操ありてこそ、世の、憂く辛き雨風にも堪へ得て、春の日の長閑にうらゝかなる家庭をも、つくり成すことを得べきなれ。もし、不幸にして、早く、夫に後るゝことありとも、かたく、貞節を守りて、遺子を生し立て、夫の

遺業をつがしめて、家名をおとさゞらしむべし。これ、我が國、古よりの、よき遺風あり。

つち女の孝義

指原乙子

つち女は、阿波國板野郡大桑島村の農夫、久太郎が三女なり。姉二人は、とくに嫁ぎて、つち、ひとり家にありしが、天性孝心いとあつく、父母に事ふること從順なりしに、家いたく貧しかりければ、十四のとしより、同村の孫兵衞といへるもの丶許につかへ、その俸米を父におくりて、活計の助となし、主人に事ふる事も、いと忠實なりしかば、見聞く人、皆、愛て稱へけり。されば、三年の年期を終りて、家に歸りしをりも、同村の市右衞門といふもの、父久太郎に乞ひ、つちを雇ひければ、又、こゝにても、一年半ばかりの間、まめ〳〵しく仕へけるが、村内の誰彼、伊勢太廟に詣でんとて、つちを誘ひければ、此上なうよろこびて、やがて、主人に暇を乞ひ、旅立つことゝはなりぬ。さるに、その日に及びぬれば、皆、よき衣をまとひ、取つくろひて出立つに、つちは、元より貧しければ、いと古びたる袷を着つ。そのさまいたく劣りて見えければ、或人の、いま少し美き衣をつけよといひけるに、神は、衣服のよしあしをもて、納受し玉ふにはあらず、唯、心の清からんこそ、神慮にも叶ふべけれと、答へけるにぞ、年若き女の身に、げに稀なる心がけかなとて、皆、感じあへり。

その後、又、孫兵衞の家へゆきて仕へけるが、或夜、奴婢ども寄りつどひて、さま〴〵の咄の折から、つひに、軍の談に及びけるに、一人の奴の、

軍は、勝負次第にて、何方へなりとも、利運ある方へ隨ひなば、下々のものに害なしといふをきくより、つち、面を赤うしていひけるには、十歳のものは、十年の皇國の御恩を被れり、百年のものは、百年の御恩あり、凡そ、此の皇國に生れし限り、誰か國恩を被らざる者あらんや。さるを、只、利運ある方にのみ隨ふべしとは、心得侍らず、若し、異國人來りて、御地を爭ふ事あらば、人は兎もあれ、妾、いやしき女なれども、いかで、命のかぎりはたらきて、君の御恩に報い侍らばやと、涙を流していひければ、一坐、皆、驚き入りぬ。その心ざまの雄々しく誠實なるは、彼の利益にのみ走りて、眼中國家なき、有髯男子を愧死せしむるに足る。

天明八年の春、母、年六十二にて身まかりしにぞ、つちが歎、いはん方なく、野邊の送りの事どアも、皆、おのが、貯へ置し給銀にて取りまかなひぬ。其の後、父、病にかゝりしに、雇はれし身の儘ならぬを、夜每々々、主人に暇を乞ひ、十丁余りの道を馳せ歸りては、父を慰め、その道すがらには、必ず、酒をとゝのへて、父にすゝめ、藥を煎じ、茶を沸し、飯をすゝめて力を加へ、又、翌日の食物を調へ、薪水の用意をなし置き、夜中もいとはず、主人のもとへ歸りぬ。父の容體、少しにても惡しき時は、終夜側を離れず、背をなで、足をさすり、四方山の噺などしつ。明方にもなりぬれば、父に暇を乞ひ、御藥はこゝに侍り、食物はかしこにと、皆、枕もとに調へ置き、又、晩にはかならず參るべし、機嫌ようあらせ玉へと、いひ置き、主人の家に歸りて、前夜の勞もいとはず、まめやかに働きけるにぞ、孫兵衛夫婦も感じ入り、暫時は、父が許へとゞまりて、看病せよといひけれども、

つちは、唯一日も、主人の用事を缺く事は本意ならねばとて、只管、彼方此方に心を盡し事へける中、父が病、やう／＼重りゆきしかば、今はせん方なく、仕を辭して家に歸り、介抱に身をゆだねしが、さればとて、貧しき身なれば、介抱の暇毎には、鹽濱へゆき、日傭かせぎをなして、活計の代となしゝが、父は長病なれば、自ら心もひが／＼しくなり、折にふれては、怒の色も見へければ、つちは、恐れて、なしぬる業を打ち捨て、酒をとゝのへ慰めけり。かばかり心を盡しけるも、天命のかぎりにや。寛政八年、父、齡八十にして、空しくなりければ、つちが悲みたとへん方なく、見るもの袖をしぼりけり。かゝる中にも、兼て心にかけ、貯へ置し金を出し、葬儀の事ども、取りまかなひ、更に、人に哂を及ばす事なきは、感ずべきの極みなり。

父、世に在りし時、日頃、四國の靈場に詣でん事を望みしが、貧困にして、その望をはたさず身まかりしかば、つちは、いたく之をうれひ、日傭かせぎをなして、父の負債を返し、さて、兩親の位牌を懷にして、靈場を順拜し、その追福をいのりしとぞ。

つち、三十四歳にありぬる時、或人いふやう、汝、獨身にて世を終らば、家をば如何すべきにやと、尋ねけるに、妾は、父の名跡を續ぐべき身の、獨身を好むにはあらねど、かゝる貧家へ、よき人は來るまじ、若し、不正の人の來りて、家名をけがす事もあらば、なき親々へも不孝なれば、反りて、獨身にて世を終り侍らん、幸ひ、一人の甥あれば、これをこそ、心頼みには致し侍れと、答へけるとぞ。父の兄にして、本家なる源左衞門と云ふ者、名田四畝を所持せしが、先つ年、その二畝を久太郎へ

つかはしけるに、源左衞門の家も、次第に貧困に陷りければ、つちは、之を憂ひて、妾は、獨身なれば、分地なしとても、事缺き侍らじ、されど、一畝は、屋敷地なればゆるさせ玉へ、殘る一畝は、返しまゐらせむに、如何ともなして、貧苦をしのがせ玉へとて返しけり。世には、兄弟の間にさへ地所を爭ひ、不和になりゆくだにあるを、本家を思ひて配分の地を返し、その家を起さしめんとす。その義、感ずるにあまりありとて、その村は云ふに及ばず、近鄕近在傳へ聞きて、人のかゞみと稱へければ、遂に、領主の聞に達し、享和二年七月、その村内に、田畠一反を賜はり、永くその年貢を免され、且、相續の者へ帶刀を免されしは、實に、つちが、三十五歲の時なりきとぞ。

嗚呼、つち女が行は、間然する所なし。その親に孝、主に忠なるのみならず、國恩を辨へ、本家を思ひ、勤勉以て家を起す等、實に、堂々たる男子も難ずる所、さるを、教育なき一農夫の女にして、よく、この行あるを思はゞ、出でゝは學の窓につどひて、師の君の御教を受け、入つてはあたゝかき父母の御愛に浴し玉ふ諸媛の、こを如何にか思し辨き玉ふにや。

家政

水に就いての話

久利軍醫

さて、水は淡きものにして、俗間に、何事も水に流してしまへと、云ふ樣な工合で、水と云ふことに就いては、全體、話の味が淡白で、面白みがあ

りませぬ。なれども、此の水に付きましては、吾々人類のみならず、地球上に生を保つものは、一日でも、なくてならぬものでありますからして、味ひが少いからとて、研究せず、不問に置くと云ふことは宜しくない。御承知の通り、吾人生活上、一日も缺くことの出來ない、大切なるものにして、其の功用の廣大無極なる、人身成分の七十五分までは水で、即ち、吾々の身體は、殆ど、水より成り立ちて居る。故に、身體が一定の水分を失つたならば、病を起すこと、恰も、蒸汽機關に水を欠くときは、直に、働きが出來なくなると同一理である。我々の身體は、日々、大約、一升三合(二リーテル半)の水を體外に出す。この分量は、知らず〳〵、飲食物よりして、絶えず補給して居ります。かやうに必要な水は、身體を養ふのみならず、或時は、嗜好品たり、又、興奮劑となり、蘇生藥となるのであります。其の他、食物を炊ぎ肴を煮、洗濯に、入浴に、家屋の掃除に、市街の撒水に、工場に、舟車に、消防に、必要なることは、世人の知る如くである。然るに、世人が、此の必要なる水に向つて、淡白に輕々しく看過すると云ふことは、實に不思議、實に嘆しくも、亦、合點のゆかぬ次第であります。故に、水に付きても、ひと通り、知り置きてよからうと思ひますことを、利害善惡を撮んで申し述べます。清水は、臭なく味なく、淺きときは、無色、深きときは、藍色にして透明、さうして、試驗上、有害の異狀成分を含まず。病原菌のないのが宜しい。されども、只、肉眼で見た丈けのことでは、たとへ、清潔な水にても、決して、良水とは申されませぬ。水の種類に就きましては、色々ありますが、大凡、之れを左の如く分ちます。

一、氣象水、と、申しますのは、取りも直さず、雨水のことで、此の雨水は、善良なものでない。なぜかと云へば、雨の降下するときに、色々の成分や、氣中のゴミを、伴ふてくるからであります。

二、井泉水、　これは、雨水が地上に降り、其の一部が地中に入りまして、終に、泉となり、井水となるのである。

泉は、即ち、地水が湧いて、地表に出るのでありまして、其の深淺に從ひて、名も、亦、異ひます。最も、淺きを草泉と云ふ。此等は、其の水温が、氣温と共に上下し、夏日は涸渇し、水質は不良である。之れより深きを、地泉と云ひまして、地水の最上面より出で、四季の温度によりて、水温も上下して、あまり好ましい水ではない。之れより深きを石泉と名づけて、氣温の

爲め、變化は要しません。要するに、泉水は、土地の狀況によりて、其の清淨あると、不清淨あるものがあります。都邑の近隣、又は、市町内に湧き出づるものは、多くは、不淨物を飽滿し、深山人の未だ踐まざる地、若くは、岩石の間より出づるものは、清淨と認めて宜しいのです。

又、地を穿ちて、地水を得る、之れを井と云ふ。之にも深淺の別がありまして、百尺以上を深井に、其の以下を、淺井の部に入れます。而して、井水も亦、深淺によりて、其の善惡を區別することは、甚だ難しいが、矢張、土地の狀況によります。概して深井の水は、純潔で、良泉に劣らぬものがあります。總て、井水は、市内又は住居に接して居られますも、若し、井の構造が不完全でありましたならば、汚水が、側より注入

し、俗に注水が致しますからして、多くは、市街の水は不良です。

三、沼水、は、種々の悪しき成分を有して、無論不良である。

四、湖水、大湖の深き處は、飲用に適するものがあります。しかし、多くは、沼水の如く不良です。

五、河水、これも、涌出する泉水等より經流するものは、水質、極めて純清なるも、耕作地、又は、都市より出づる地水、戸々の下水、工場の廢水等を混ずるときは、其の性質、一變して不潔となります。併し、川の大小、及び、流の緩急によりて、其の趣を異にしますが、急流にして、川の大なるものは、自然の働きに因りて、清潔になります。故に、場合に因りましては、飲用に供することが出來ますも、頗る、注意を要します。（湧水は略す）

水の用途は、之れを、通例、飲用と雜用とに大別します。しかし、此の飲雜用水とも、必ず、要求の條項を備へなければなりませぬ。なぜなれば、時の狀況緩急に因りまして、人身に、危害を及ぼすからであります。

水の危害、水は、其の飲用の如何に因りまして、害を招くことがあります。其の量多きに過ぐるか、或は、之れを飲むこと過急なるか、寒熱の度に過ぐるときは、胃の消化力を減殺したり、身体の衰弱を來たしたり、或は、胃痙を起したり、若しくは、腹痛下痢を發し、若くは、眩暈嘔吐氣を催し、胃弱胃炎を起すことがあります、特に、水は、土地を滲透して、涌き出づるものでありますれば、若し、土地が、動物の排泄物、糞便、家用廢棄物等を以つて、汚されますと、自然に、此の汚物を混

じます。たとへ、肉眼で見たところが、清澄無味無臭でありましても、實に、危險であります。就中、人家稠密の場所にして、圃圊の搆造不完全なるか、或は、下水道の不完全なるか、溝の流利、惡しきときは、悉く、不淨分を含んで居ります。かの「アンモニヤ」、「亞硝酸」、「硝酸食鹽」等の多量は、糞便の滲出でありまして、實に、此の滲出物、幷に、溝より漏洩する所の狀況を、試驗して見ると、言語同斷で、實に、嘔吐を催す次第であります。故に、健康經濟からして、衞生思想の發達せる國に置きましては、上水下水の工事が行はれてあります。

又、水中に、土類鹽分を含有する多少によりて、水の硬度を分ちます。通例、衞生家の許す所の硬度は、十八度から二十度でありまして、即ち、水、十萬分中、十八乃至二十分以下の石灰、及び、苦土を、含むものを可とします。此の硬度は、色々の關係を持つて、殊に、經濟上にも關係があります。日常、御經驗もありましやうが、僅な事であるから、左程、經濟上の觀念も起りますまい。併し、一年に積らば、多額のことになると思ひます。そは、他にあらず、硬度多ければ、肉、菜蔬類を煮るに、硬くなりて、第一消化を妨げ、滋養分を損じ、又、衣服を洗濯するにも、汚垢を去ることが出來ないのみならず、石鹼を多く費します。其の他、酒を造るにも、染物を爲すにも、皮をナメスにも、紙を製するにも、用に適せず、又、蒸滊機關にも適せず、茶にも可ない。夫の鐵瓶の水渣の附くは、之れが爲めで、皆、知らず〳〵の中に、經濟上の損失をするばかりでなく、或は、病の原因ともなります。水中瓦斯は、水に快味を與へるものであるが、飮水、及び、煮沸したるもの

は、淡くして佳味なし。其の味を善くしますには、振りて、空氣を混合しますと、快味を與へます。以上話しました事に、直に、害なしとするも、往々、下痢を起すことが多くあります。況んや、如此不潔物を混じたる水は、又、他の下等動物が、能く蕃殖成育し、時の狀況に從ひ、コレラ、腸チプス等の流行蔓延し、慘狀を極めたり、或は、寄生蟲卵を媒介し、人を苦惱せしめます。彼の顏面蒼白、氣息奄々たる人、多くは、虫病に罹るものであります。吾人、日常目擊するも、敢て、意に介せざる回虫も、亦、水に依りて來るもので、小兒が、能く苦しめらるゝも、亦、十中八九は、回虫であります。しかし、此の回虫は、驅除することが出來ますが、恐るべき彼の「ヂストマ」(肝蛭)虫が、一たび人身に入るときは、療法發見せられざるよりは、死病に陷ります。ヒラリア蟲病(人血絲狀虫病とて、尿か、乳の樣なる色になる病。)其の他、サナダ蟲、十二指腸虫病、(九州に多し。)蟯虫病も、亦皆、水より來る所の病であるのです。其の他、雜用水にも、佳良なるものを、撰ばんければなりませぬ。のみならず、矢張、飲用水の性質を持たねばならぬ。なぜならば、食器を洗ひ、衣服を洗濯し、家の洒掃に用ゐるとせば、直接と間接の差はあるが、過害の來るや同じことであります。彼の夏日、又は冬天、風塵の飛揚する日に、溝水を撒布するが如きは、實に、害があります。若し、其の溝水中に病毒あるときは、危險甚だしく、況して、臭氣を有する水ならば、衞生上にもよくないのであります。所謂、病毒を播き散らし、惡臭を傳ふと云ふてもよろしい。故に、雜用水に就いても、雜用と云ふことのみに意を用ゐて、他の點に意を注がんければ、以上述ぶる所の、害を

引き起します。そんならば、如何なる水を使用すれば宜しきやとの、問が起りませうが、即ち、化學的、及び、理學的撿査を施し、更に、細菌學的試驗の結果に因りて、良否を決定せばよろしいのですから、年に、二回以上は、必ず、衛生家に依賴して、水の試驗をなし、其の適否の鑑定をなすことが必要で、又、健康と經濟から申しましても、實に、有益なる事でありますから、此の點につき、注意あらんことを希望します。終に一言しますが、古の賢人も申しました事があります。曰く、夏は湯を呑み、冬は水を飲めと。要するに、實に、衛生の旨に適つて居る。併し、私は、一年を通じて、生水を飲むと云ふことは、純良なる水を得ざる以上は、危險であるから、冬も夏も、煮沸したものを飲用に供せられんことを祈る。まして、生食と云ふことは、野蠻時代の遺物にして、今日、文明の世の中に於いて、火食の道が備る以上は、生水生物を飲食すると云ふことは、斷然、止めた方が宜しくあります。

（完）

産所式（二）

有住常子

懷姙の婦人、着帶の祝の時は、其の婦人の夫、自身帶を取りて結ぶ事、古の例なりと、是も、貞丈翁が雑記に記されたり。さて、其の儀式は、近くも、かく有りしなり。御盃事は、三献を出すべし。其の大方は、左の如し。

○帶の名は、産所法式に、懷姙して五ヶ月になる時、着帶する也。此帶を、岩田帶と云ふなり。吉日をえらみて、此祝あるべし。（以上法式）齋、按するに、岩田帶とは、結肌おびなり。

○ゆはだ帯結ひそむに、祝の日取方角を定めし古例あり。

○帯の調べ様、高位の御方は白綾なり。又、白き絹と、白き布と、二色を用ゐるあり。

○絹は祝の日、布は常に用ゐるあり。平人は、必ず、布を用ふべし。はしぬひあるべし。

○帯を、一族方へ参らせらるゝ事あらば、二筋三筋も、常の帯を進物にする如く、檀紙などに包みて、臺にすゑて参らすべし。

○祝の日に至りて、祝の刻限に、姙婦座敷へ出でたまふ時、帯持参すべき夫婦の人、其の座敷へ出で、御禮なし、終つて、座を立つて、夫婦して、帯の据りたる廣ぶたをかきて出る也。婦は、先をかき、夫は、あとをかくべし。

○さて、右の如くして、次第に姙婦の前へ参る。此の時、姙婦、吉方へ向ふべし。御座をなさせ申して、夫婦、廣ぶた持出でながら、立つて、御前におくべし。扨、夫、帯を取つて、婦に渡して、廣ぶたを取りて退くべし。婦は帯を取りて、姙婦の左のそばへ参りて、帯をのばして、姙婦の右の袖より、帯を通して結ぶべし。

○さて、婦は、めでたきよし申して、退くべし。

○右は、通常の式にして、子孫繁昌の夫婦の者の、つとむる式法なり。

○さて、其の儀式すみて、料理を出して、祝あるべし。

○此の時、主人御夫婦より、帯むすび参らせし夫婦へ、御盃くださるべし。夫婦よりも、進上物あるべし。

禮節談片（續）

石井泰次郎

五節の夜の闇打の條を引いて、例證をあげて見やう。豐明節會の夜、闇打にせんと支度あり。

これは、前行に、

法皇、常の仰せには、忠盛なからましかば、誰か、朕をば佛になすべき。

とて、さま〴〵に賜もの〻有つたのを、雲の上人たちが、嘲り憤つた。と有るによつて起つたのである。

忠盛、此事ほのかに聞て、我右筆の身に非ず、武勇の家に生れて、今、此耻にあはん事、身の爲家の爲、心うかるべし、又、此事を聞きながら、出仕を留めんも云甲斐なし。所詮身を全うして、君に仕ふるは、忠臣の法と云ふ事あり。

と云て、内々用意あり。

これ、私事をさしおきて、豐明節會の公事に仕へ奉る、禮を正さんと思つたのである。禮を正すと共に、其の節を計らはんと考へたのである。

爰に、忠盛朝臣の郎等に、進三郎大夫季房が子、左兵衛尉平家貞と云ふ者あり。本は、忠盛の父、正盛の一門たりしが、正盛の時、始て、郎等職と成りたりし木工右馬允平貞光が孫なり。備前守の許に參て申しけるは、今夜、五節の御出仕には、僻事いで來べき由承り候。但し、祖父貞光は、恐れ乍ら御一門の末にて侍りけるが、故入道殿の御時に、始て、郎等に罷り成候けりと承る。貞光には孫なり。季房には子なり。親、祖父に、勝るべきならねば、其振舞を仕る殿中の人々、我も我もと思ふ輩は、數多くこそ侍らめども、箇樣の實の詮にあひ奉らん者は、類少うこ

そ候らはめ、御伴には家貞参るべし、御憚り無く御出仕有るべし。

是、まことに親に對するの禮節を全うし、又、友に對するの禮節を明らかに説き、主に對する郎等の禮節をつくさんとの誠心である。其の差別は、能く、文章の上に見る事が出來るであらうから、別にいはぬ。

と、申しければ、忠盛然るべしとて、召具す。

是、郎等に對する禮節を失はないのである。

家貞は、布衣の下に、萌黄の腹卷、衛府の太刀を佩ぎ、鳥帽子引入れ、袖纐て、殿上の小庭にあり。子息平六家長は、歳十七、長高く、骨太くして、剛の者、度々はがねを顯して、逞しき者、是も、布衣の下に、紫絨の腹卷きて、赤銅造の太刀佩いで、無官なれば、徐々として、左右の手を土につきて、犬居に居て、雲透に殿上の方を伺ひ見て、親の家貞、あゝといはゞ、子息の家長も、つと打入るべき支度なり。

是、即ち、上中下の位置をあやまらずして、時の急に應じては、禮のほかに、其の節をつくさんと、かまへたのである。犬居に居て、殿上を伺ひたる間の、二人の心志は、此の書の文章と、此の著作者の誠心と、此の著作時代の武家禮節の程度につきて、研究すべき好材料であらう。只、一通の文章と、見すごすべきものでは有るまい。現今の風俗改良會の如き、公徳問題の如き、敎育會の如き、貴重なる會合の主眼とすべきは、この二人の心志にして、即ち、主を思ふの一點にほかならないので有らう。もし、其の外に於いて、求むる所があるならば、其の會合は、設けなくってもよいのであるし。かし、この二人の心志を以つて、其の會合がたつて居るとしたらば、早く、其の心志の

まことを見る事が出來る。禮節の素養がほしいのである。此の素養が無いならば、心志ありと云つても、夫は、外面ばかりで、眞實には、心志がないのである。

このつぎには、言語の禮節が書いてある。それは、殿上の人々、怪をなしければ、頭左中將師俊朝臣藏人判官平時信を召して、宇津保柱より内に、布衣の者候ひぬるは、何者ぞ。事の體狼籍なり。罷り出でよ。と、いはせたりければ、家貞は、主君備前守、今夜、闇打にせらるべき由承ればなり。果給はん樣、見奉るべければとて、畏ばなり。つて候ひければ、事の樣、誠に、主、ことに遇はゞ、堂上までも切り上るべき頬魂ありける上に、忠盛朝臣、黒鞘卷を裝束の上に横へ指して、支度の計りなき體にて、腰の程をさし拂げたる樣にして、柄を人にぞ見せける。人々、事から尤しとや思ひ合せられけん、其夜の闇打はなかりけり。

郎等として、主をはづかしめざる、是、言語の禮、臣下として、堂上の禮をみださじとの師俊が言語も、又、よく其の節を失はないので、又、忠盛がさまも、能く、臣としての禮節に、かなひたる行爲である。

此の時の宴醉の歌の拍子に、忠盛をあしくいひなせしを、忠盛安からず思はれたが、堂上の事ゆゑ、恐れしのばれて、後に、家貞が宴醉の座の樣子を、尋ねたにも、有のまゝに云ふたならば、僻言が有るであらうとて、別の事なしと答へられたのも、殿上人たる者、腰刀を差顯す條、傍若無人の振舞なり。或は、相傳の郎等と號して、布衣の兵を、殿上の小庭に召おき、といふことで、解官、停任

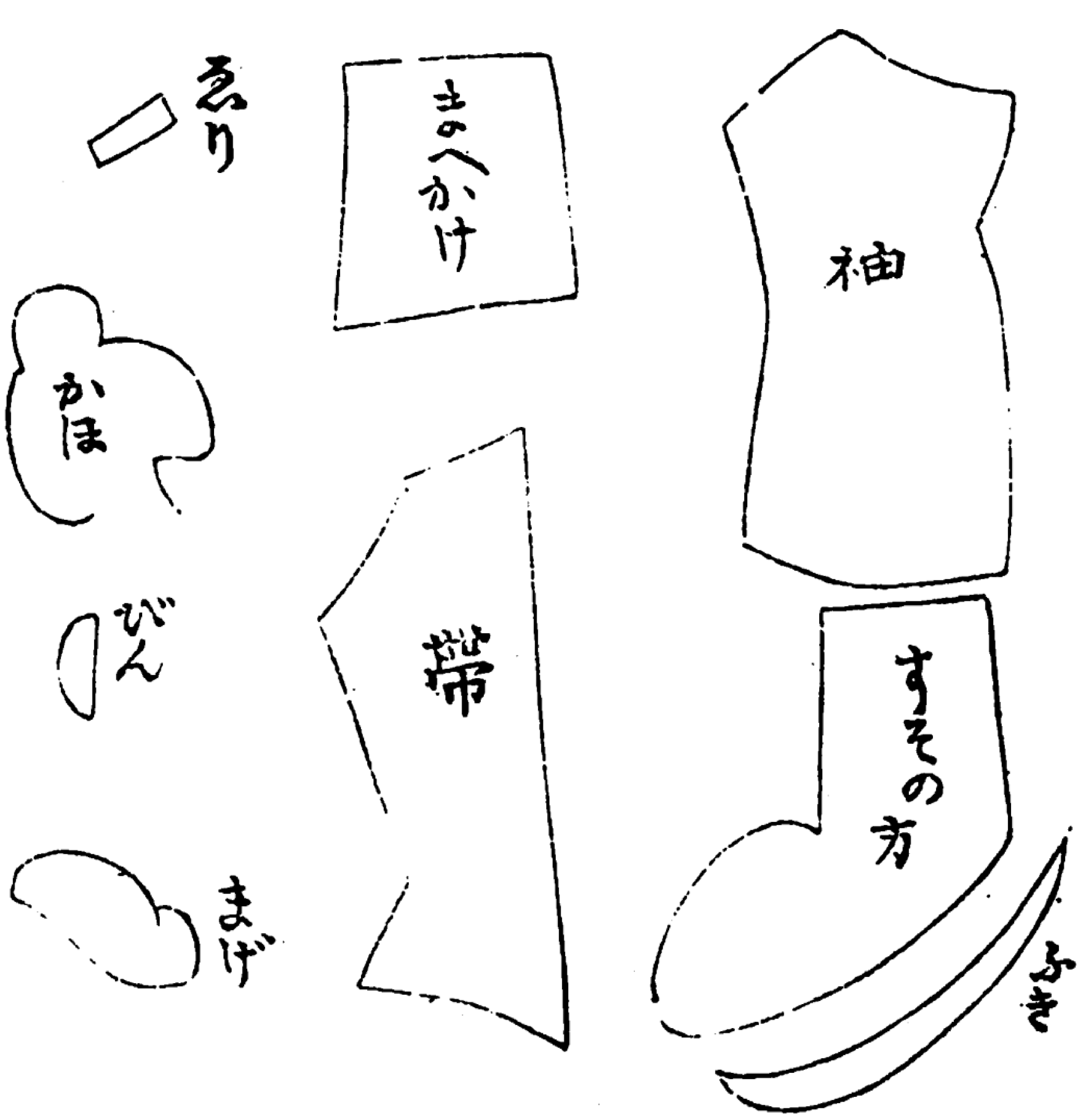
せらるべき由を、公卿殿上人一同に申されたに、よつて、上皇より御尋ねがありしに、答へ奉た言語も、よく〳〵のつて、君臣の禮節をあやまらず、此の段の末文にも記してある通り、誠に、帝を助くる忠臣の仕方である。この忠啓の振舞、この家貞が奉公が、即ち、禮節の標準である。

たちぬひ

西山たい子

久しくわづらひて、いたうおくれたり。やう〳〵、くれにも近づきぬ。羽子板の押繪、とりいそぎ云ひつゞけん。

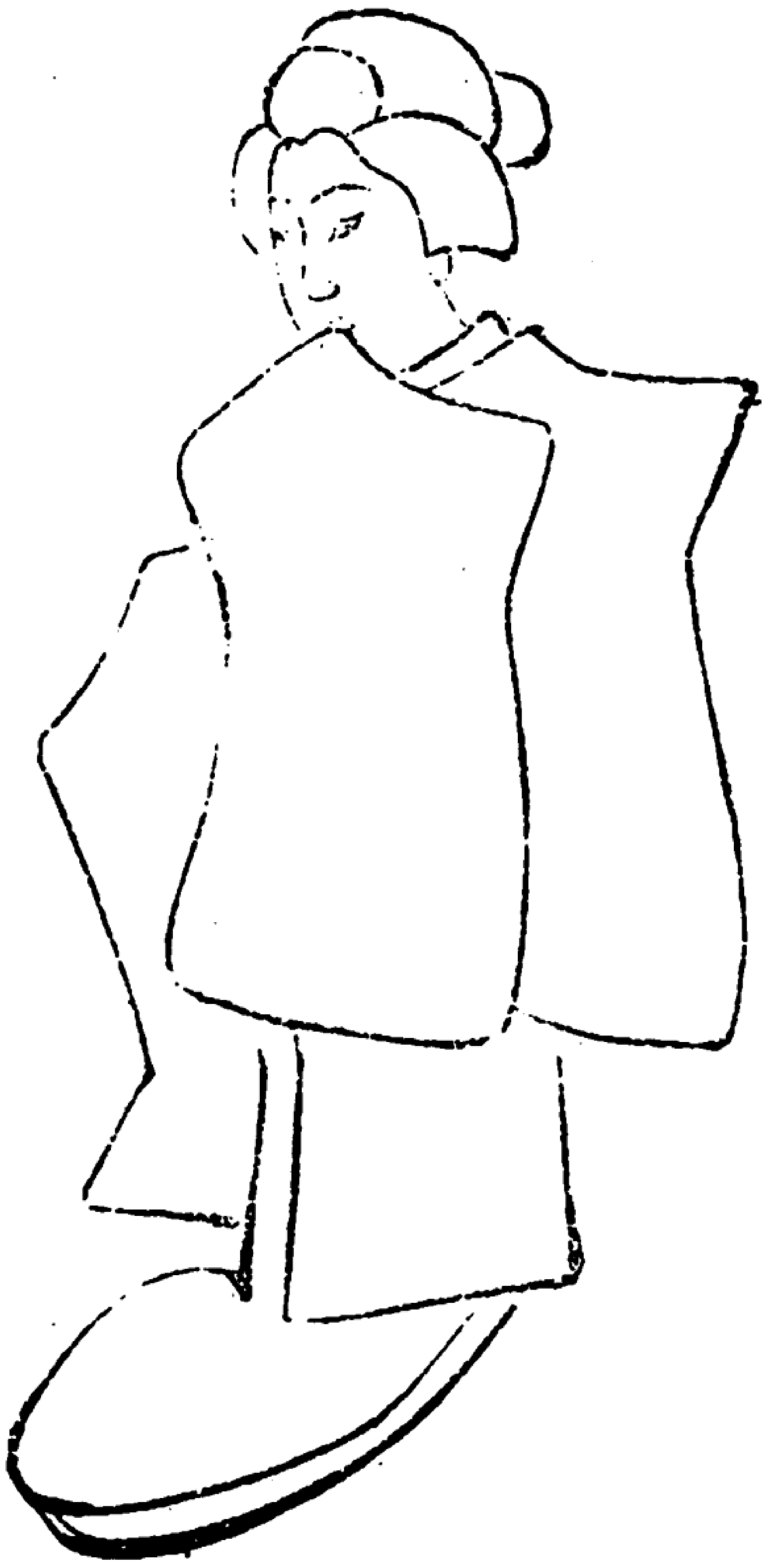
美人の形



厚紙を、右の如き形に切り、但、袖は、二つ、同じやうにたち、上の方にする片袖、及び、こしの方に、綿、少許を入れ、思ひつきの切を被せ、顔

を畫き、左の如く、み合すべし。之れは、尤も、やさしきものにて、帶、前掛、ふき、ゑり等は、色紙を用ゐてもよし。

その圖



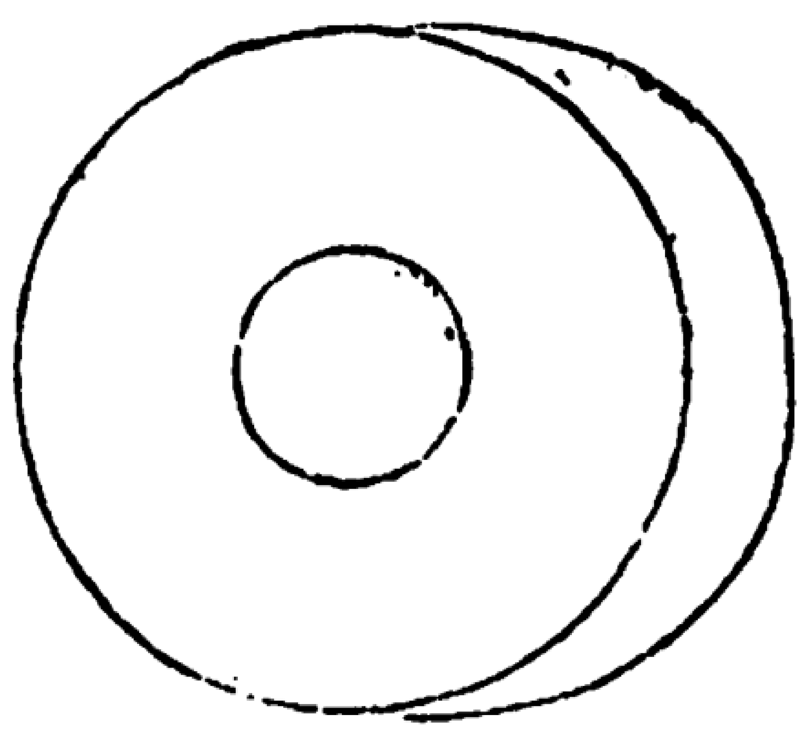
割烹覺帳

切方煮方

石井湧太郎

一ッ

たまごもどき

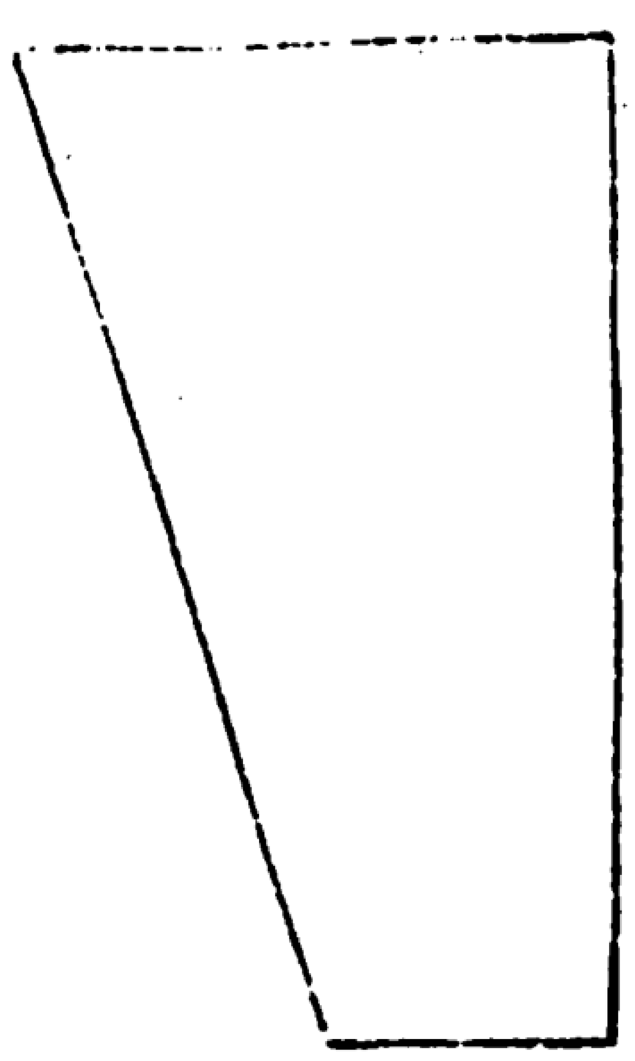


是は小口切です

豆腐を絞りて、能く、水を切る笊か、馬尾篩にあげて、水は切るのです。さうして、葛粉を少しませて、つなぎとして、擂盆にてよくすつて、馬尾篩にて漉して、馬尾篩のうらにのせて、木杓子にて、押してこすのです。この豆腐は、かためになるやうに、葛粉をまぜるので、さて、それから、胡蘿蔔のよいところばかりを、丸く、立むきにむいて、

ゆで〻、よく、味を、みりん醬油砂糖でつけて、右のすり豆腐を以つて、まいて包みて、竹の皮のおかに入れて、く〻つて、蒸籠に入れて、むすと、かたくありますを、だしてから、小口切にすると、一寸、玉子の黄味のやうです。黄味の所は、さつまいもでも、間に合ふといふのですけれど、にんじんの方が、くづれないでよいのです。

二ッ



形は湊形といふ切是です

同

氷豆腐の新らしきを、湯にひたしておいて、よく、水をしぼりまして、氷豆腐十枚、雞卵五ッのわりに、玉子をといて、醬油と、みりんの煮切を合はせて、其の中へ、氷とうふを入れて、よく、しみこませて、後に、取出しで、すぐに、玉子やき鍋に入れて、一つびとつやくと、玉子燒のとほりにおります。

だいどころ

すりいもかきあげ

づくいもを能く洗ひ、皮を去り、山葵おろしにておろし、摺鉢にて摺り、鷄卵を加へ、又、すり交せ、玉ねぎ、人參、牛房杯、こまかにきざみ、前のすりたる芋の中にいれ、まぜ合せ、杓子の上にのせ、小口より能程にかき落し、胡麻油にてあげるあり。是を器に盛り、大根おろし、醬油にて、食すべし。

蠣売の柿酢

新鮮なる蠣売をえらみ、ふくろのみをとり、布巾にて、水氣をふきさり、熟したる柿の皮をむき、

山葵おろしにておろし、蠣売と交ぜ合せ、器に盛り、甘酢を作り、其の上よりかけて、用ゐるべし。

鹽鮭のバタ燒

鹽鮭を、薄く大きく、刺身の樣にそぎ、バタを塗り、金鋼にて燒き、パリ／＼になりたる時、三切程皿に盛り、三ッ葉、せり抔添へて、ソースをかけて、用ゐるべし。

から卷酢

豆腐のからを能く摺り、種々の野菜をいれ、鹽、砂糖に、少量の酢を加へ、いりつけ、鷄卵をつなぎにいれ、淺草海苔に、酢をうちて、卷くなり。

たこの獅々煮

たこを、鹽にて能く洗ひ、足に、小豆を加へ、ゆでゝ、皮を剥ぎ、これを、細くさき、味りんにて、味をつけ、更に、胡麻油にて、いため、唐の芋、八つ頭等と共に、白味煮にするなり。

鴨の山葵あへ

鴨の能き肉をうすくへぎ、雁にても宜し。ざつと湯を通し、酢につけ、食鹽をふりおきて、暫くして酢よりあげ、山葵にてあへるなり。

學藝

〇家計簿記法講義（承前）

磯部武者五郎

本號にも、前號の續き、元帳の記入法を示します。其の中で、財産に屬するものにて、預金證劵類の二科目だけは、複式の樣な記入法に致します。財産に關するものは、大切のものであります故、一つことを、受拂の兩方へ記すことに致しました。尙、一覽表の上で、よく、御覽あらんことを乞ひます。

34年		摘　　　要	受		拂	
月	日		圓	十錢厘	圓	十錢厘
10	22	公債證書百圓一枚	95	000	95	000
	〃	現金公債證書百圓一枚				
		決　算　高	95	000	95	000

34年		摘　要	受		拂	
月	日		圓	十錢厘	圓	十錢厘
10	20	當座預金某銀行へ	20	000		
	〃	現金某銀行へ			20	000
		決　算　高	20	000	20	000

34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	25	現金大阪の親戚病氣に付主人出張汽車其外使用	20	000
		決算高	20	000

學藝

34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	18	現金慈善會へ寄附	5	000
		決算高	5	000

34 年		摘 要	拂	
日	月		圓	十錢厘
10	15	現金醫師及藥價診察料	5	000
		決 算 高	5	000

34年 月	日	摘要	拂 圓	十錢厘
10	7	現金郵便切手貳拾枚買入		600
	17	現金在英國ロンドン某氏へ電報出す	10	000
		決算高	10	600

34年		摘要	拂	
日	月		圓	十錢厘
10	30	現金車屋拂	20	000
		決算高	20	000

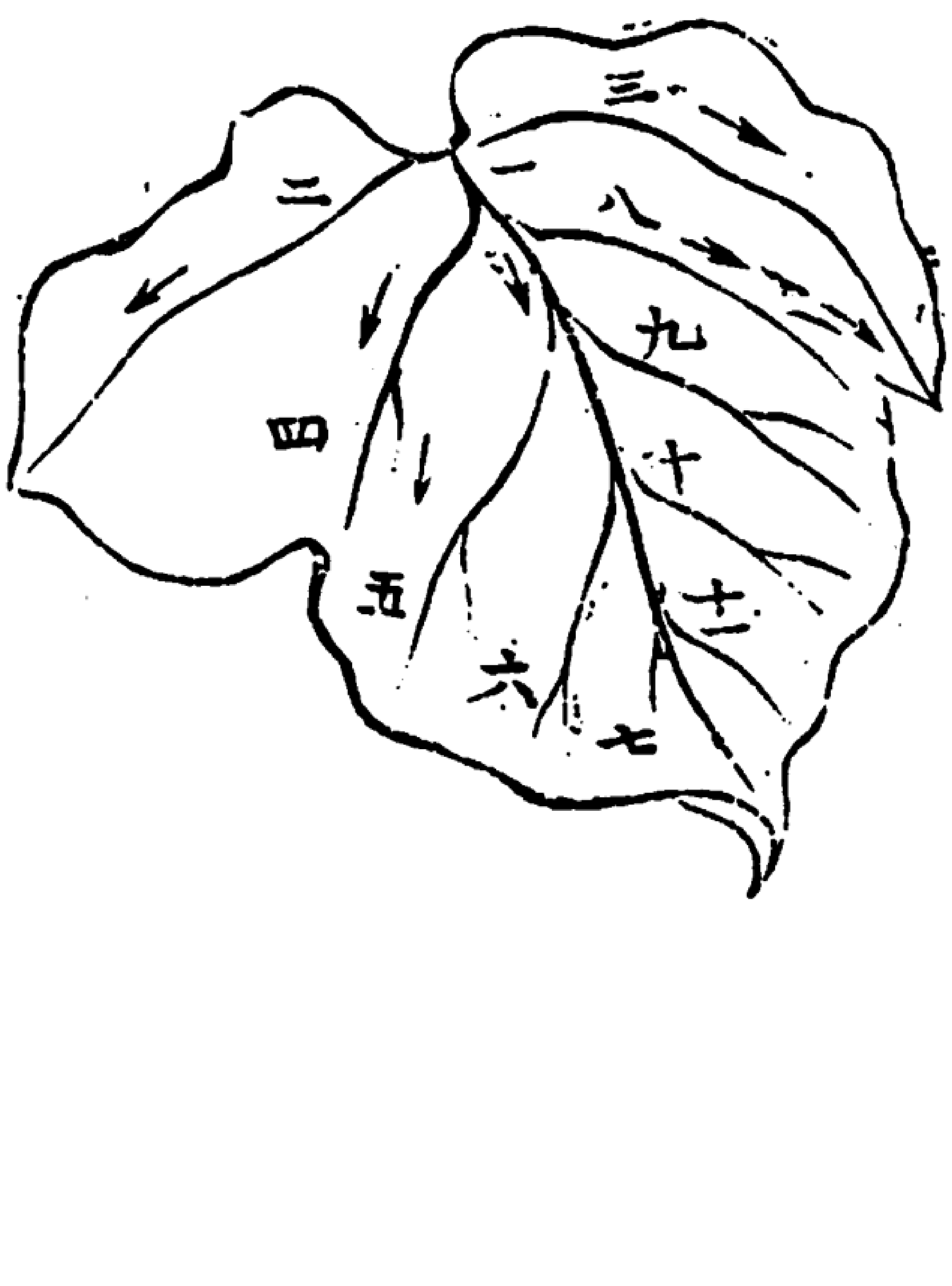
和畫通信講義（第十九回）

山崎彩峨

朝顔は、花葉ともに淡き草なり。されば、墨畫彩色の別なく、勾勒に畫かむには、なるべく、纖麗の筆を使用すべし。こを沒骨にゑがくには、花葉ともに、淡墨を含めし筆先へ、濃墨を附してゑがく。蔓は、淡墨にて畫き、竹は、淡墨を挾墨となしてゑがく。葉脈は、濃墨にて入るゝなり。

彩色にては、種類極めて多く、一々說くことかたし。されど、大別すれば、藍、紅、白、紫に過ぎず。稀に、黄色なるものあれど、そは、常には畫かぬなり。即ち、色の配合は、紅色のものは、臙脂、白色のものは、胡粉にて畫き、それに、黄がち青色の隈を施し、紫色のものは、藍紅二色を混和して、適宜に製す。藍色は、藍か郡青かを使用すべし。その使用法は、その實物の色にかなへるやうに、濃淡二つを製しおき、まづ、濃色を筆に含め、のち、濃色を附して、濃色の方を外側になして、一齊、或は、各辨に畫き、筆端を水にてぼかすべし。（班點あるものは、椿の條を參照すべし。）子房と蔓とは、黄がちの青色、葉は、表は通常の青色、裏は黄がちの青色にてゑがき、乾きて後、藍か藍墨かにて、葉脈を入るべし。竹は、黄がちの青色を挾墨となして畫き、墨にて節を入るるなり。

葉脈




眼
十六
十八
十九
廿
廿一
廿五
廿六
廿七
廿八

文林

森時雨　東久世通禧

落葉してあらはになりしやま本の
もりかけくらく時雨ふるなり

漁村時雨　佐々木高行

夕日かけ浪にはさしてあま小ふね
かへる磯屋にしくれふるなり

殘菊宴　蜂須賀茂韶

冬なからかすみを酌てのとかにも
さかりひさしき菊をみるかな

故郷擣衣　久我建通

今はたか住家なるらんふるさとの
むくらかおくにころも打つなり

山影寫水　津輕承昭

ゆくみつのみとりも深し松たてる
龜の尾やまのかけをうつして

細徑　宮地嚴夫

そこふかき溪のなを淵したにみて
行こそなつめやまのほそみち

暮時雨　北郷久政

夕からすつはさぬれてや歸るらん
そらかきくもり時雨ふりきぬ

林落葉　小出粲

こ陰れて秋はそれとも見えさりし
紅葉つもれりすきのはやしに

殘菊薰閨　大口鯛二

おく霜にまかきはあれて閨のうちの
小かめにかをるしら菊のはな

鐘聲幽　遠山英一

かすかにも鐘の音すなり宿るさへ
里の火かけもみえぬやまみち

親の歌多くよみける中に　下田春興

しもさゆる冬の夜さむのあつふすま
あつさは親のめくみありけり

節女傳を讀みて　淺井周治

山風にみきは折れてもときは木の
松のみさをはかはらさりけり

岡紅葉　蜂須賀隨子

岡の名の忍ふとすれともみちはの
こかるゝ色はかくれさりけり

山時雨　鍋島榮子

初紅葉たつねあたりてかへるさの
やまちにまたも時雨ふるなり

曉紅葉　前田朗子

山まつにましる紅葉のいろはかり
やゝみえそめて鷄か音そする

野逕霜　西四辻茂子

遠さとの小野のほそみち霜さえて
ひとすち白くみゆるけさかな

籬殘菊　南郷柳子

殊さらにあはれなりけり霜かれの
まかきに殘るきくのひともと

暮秋月　柳原愛子

秋もやゝ末野のはらになくむしの
こゑよりほそきゆみはりの月

初霜　大谷籌子

朝またきおきいてゝみれは庭いしの
うへしろたへにおけるはつ霜

秋晴　松平健子

秋風もそよとおとしてこゝちよく

はれわたりたる朝日かけかな

岡月　中島歌子

木のまもる忍ふか岡のつきみれは、
みやこのうちの心地こそせね

川邊螢　宮地小東洋子

水上のきくやさかりになりつらん
くむ袖かはるまへのたにかは

漫録

馨烈麗娟（前號口繪參看）

三輪田眞佐子

おのれ、さきごろより病にかゝり、筆を採ることも難きがため、久しく讀者と誌上に於いて、相見るを怠りしこそ、いと遺憾なりけれ。されど、未だ、健康舊に復せざるのみならず、種々の關係もいと繁きを以て、先號に約せし紅蘭女史の傳記を、ものすることも能はざるべし。蓋、女史は、世に類まれなる來歷と、氣品とを有するものなれば、簡單にその傳記をものすべきは、反りて女史の女史たる眞價を、傷くる恐なしと言ふべからず。依りて、おのれは、茲に、先號の口繪にのせける、女史が、菊畵に題せし二句の意義を解釋して、以つて、其の如何に高尚なる理想を懷きしかを、讀者に媒介せん。實に、能く玩味して、其の二句を見よ。所謂、寸鐵人を震慄せしむる趣あり。そも〳〵、先號に掲げし菊畵は、一見して、精を極め、妙を巧みたるものにあらざるは、何人も知るならん。否、明治の今日、敎學の隆盛につれて、女生徒などすら、精巧極妙の作なきにあらざるべ

し。然るに、おのれの、これを讀者に媒介する所以のものは、筆跡の如何にあらずして、其の筆を馳せ、墨を流し、女史の胸中に潜みたる、非凡高潔の理想を知らしめんためなり。

回顧すれば、おのれ若年のころ、女史と寢食を共にせしこともあり、詩と書を學びしこともあり、亦、過ぎこし方行く末のことを、睦しく語りて、共に、袖をしぼりしことさへありけり。從ひて、女史の感化を受くるも淺からざるべし。などか地に敷く霜露を踏みて、黃泉に入りし女史を忍ばざらん。おのれ、晩秋女史を思ふ情切なるころ、記者の求に應じて、多年居室の外に出さゞる、女史の筆を讀者に媒介するも、聊か、同感の人もがなと思へばこそ。

既に、前號にて明かなるが如く、女史の題に曰く、

後レ時氣味逾馨烈

淺 餘

離レ俗容姿倍麗嫺

と、即ち知るべし。女史の示さんとするは、書にあらんよりは、寧ろ、其の精神なるべし。なほ、今日、此の二句より聯想するに、女史の風采は、誠に、俗を離れて麗嫺なりき。時に後れんも馨烈なりき。然れども、決して固陋に陷らず、亦、輕浮に流れざりしは、おのれの恒に敬服するところなり。例令ば、女史の服装は、概ね、紫色、若くは、鼠色なる紬の紋附に、大和錦の帯を立結にしめ、懷劍を腰にして威あり。而も、武からざる動作を想像すれば可ならんか。

女史が、安政六年正月、その良人、星巖先生の勤王事件より、餘累を蒙り、獄中に投ぜらるゝや、獄吏の言ふやう、汝が良人に關する國事につきて、知るところを詳かに告げよと。女史、從容迫る色なく答へけるには、おのれの良人は、國家の

一大事を、輕々しく、妻女等に漏らすべき人にあらず、故に、秋毫を聞きしことなく、亦、知りしことなしと。時に、獄吏唯々と、亦、問ふ能はざりしと。これ、固より、一言の中に、東洋流の男尊女卑が存するを免れずと雖も、法庭に於いて、良人の人物をして、九鼎より重からしめし態度は、今日の喋々喃々、我を禍し、亦、他を害する女子を、慚殺せしむるに足らん。

その他、女史の氣品と來歷につきて思ひ來れば、轉た、欽慕に堪へざるもの多し。故に、他日、完全なる女史の傳記をものして、世に公にすべし。

唯、おのれの期する所は、現今、恩義を忘れ、節操を知らざる、輕浮の女子をして、亦、奸佞を事とし隱密を專にする、汚俗の女子をして、馨烈なること、麗嫺なること、恰も、菊花の如くあらしめんことにあり。實に、菊は、白露を含みて敢て誇らず。亦、媚びず。その天眞を學ばんかな。その天眞を敎へんかな。

女子要書解題（幾之部）

三浦千畝

北山院御入内記　一巻

北山ノ院は、後圓融天皇の宮人にして、後小松天皇の國母なり。諱は康子。權大納言藤原資康の女。宮に入りて、寵幸あり。從一位に敍せらる。後に、足利義滿に嫁し、北山に居る。後小松天皇位に即き給ふに及びて、三宮に准ぜられ、號して、北山院と云ふ。

此の書、應永十四年にありたる由、巻末に見えたり。北山院御入内の事を記されたること、書名の如し。その供奉の女房の車のもやう、衣の

色など、細に記されたる所、常時、女官の風裝をしるに便よし。(群書類從雜部)

禁裏女房内々記

一卷

此の書、作者さだかには知られざるも、文中、所々に記せる識語やうのものに、『九條まん所樣の、あそばし候うつし也。公方樣仰によりて、伊勢守どのへ御つたへ也、秘すべし、秘すべし、ゆめゆめ他見あるまじく候。』又『右は、女御樣へ、藤さい將殿より御上げ候うつし也。』などあるを見れば、いづれ室町の中世、應仁以前のものあることは、大凡にしらるゝ也。(公方樣とは、八代將軍義政、伊勢守とあるは、伊勢貞宗、若しくは、その子、貞陸なるべし。)

此の書は、禁中女房の大方の心得を記せるものにして、その目録は、禁中樣女中方衣裝の事、同衣裝あし樣、みづし棚のおき物の事、黑棚の置物の事、びんそぎの事、元日之御祝、年中行事、身もちの事等あるが、記事の前後、重復したる所もあり、云ひ足らぬ所もありて、躰裁、甚、とゝのはざるふしの多きは、もと切れ切れなりしを、強て、續ぎ合せたるものにもやあるべき。さて、此の書、ふるくは誤りて、御湯殿日記といひしよし奥書に見え、なほ、伊勢貞丈の奥書にも、左の如くいへり。

此書の題號、もとは御湯殿日記とあり。しかれども、右の奥書を見れば、御湯殿日記といふ物は、これにあらずといへり。ある書に、この書の文を引きて、その題號を、禁裏女房内々記としるしたり。是によりて、今あらためて、禁裏女房内々記と、題號を書き置くなり。明和九年壬辰きさらぎ初の六日、伊勢平藏貞丈。

しかるに、此の書を、一本に『禁中様女中方御祝之次第』と、題したるがあり。比校するに、小異はあれど、もと、同一のものなることしるし。又、『女房私記』と題する書も、その實、同一のものと見えて、右『禁中様女中方御祝之次第』の奥書を見るに、

右、女房私記は、先年、御所かたより拜借してうつし置き候。しかれども、其中、心得がたき事共おほく候ゆへ、承秋門院様の典侍、石井局山井三位兼乃卿御女御里に御ざ之時、御めにかけて、所々御引直し、又、朱點をしるし候。云々。

とあり。(承秋門院は、有栖川幸仁親王の御女にして、東山帝の中宮、幸子女王なり。享保五年崩ず。)されば『禁裏女房内々記』とあるも、『禁中様女房方御祝次第』とあるも、はた『女房私記』とあるも、もとは、ひとつものなること知るべし。

近世女風俗考　二巻一冊

生川春明の著なり。春明は、伊勢國安濃津の人にして、名を正香といひ、通稱を三良助といへり。家は、藥ひさぐ商人なりしが、幼きより書をよみ、畫を好み、俳諧より和歌の道に入り、やがて、同國山田なる足代弘訓の門弟となりて、語學を學びたり。又、蘭語を習ひ、傍ら、寫眞術を好くせり。(明治の初年、自ら、寫眞店を開き、これを業とせりといふ。)著書には、本書の外に、近世男風俗考といふもあり。其の他、開化文章、皇國語學自在、言葉二路、和蘭活詞考、祖翁發句係詞、俳人大系圖、俳諧古物語、奇跡職人考等の著あり。明治二十三年、年八十七歳にて歿しぬ、

此の書、書名の如く、徳川時代の女子風俗に付き、諸書を引證し、畫を掲げ、解説を附したる

ことゝ、ほゞ、京山の歴世女装考に同じ。

目録

髪を頭の上に結ぶ事　髪を結ぶ職の事　前髪の事　髲の事　髷の事　額付の事　眉に心入る事　頬紅、爪紅、　頭の飾の事　掃枝、笄、　櫛の事　簪の追考○以上上巻

伽羅を髪に留めし事　髪油の事　鏡の事　被衣の事　塗笠、編笠、菅笠、皆笠、綿帽子　奇特頭巾　振袖の事　縫箔小袖　裲襠の事　女合羽　日傘の事　烟艸の事　さげ帯　つけ帯　天鵞絨襦子　名古屋帯　前帯　かるた結　吉彌結　水木結　抱へ帯　足袋の事　簡金剛　草履、雪駄、下駄、服飾追考○以上下巻

此の書は、天保頃の著なるを、明治二十六年、東陽堂にて開版せり。大槻如電氏の序あり。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

村上義光

君かため散るや吉野の花やくら
高きその名はかくれさりけり

評論

君が爲め散る、とはいふべからず、君がためとあるには、死ぬとこそいふべけれ。體をなさぬいひざまなり。三句、花何といふこと數々あれど、花櫓といへる、こは杜撰なるべし。例なくとも、よみてよき詞あらばこそ。

菊池寂阿

今も世の人のなみたのかゝるかな
つまにとつみしことの葉草に

四句、くるしきいひざまなり。つむ、或は、ひろふなど、他にあることのに對していふべきなり。そは、集る意あり。寂阿、一首の自詠をおくりたるなれば、つむといふべからず。

結城道忠

なき世にも西をねかはぬ丈夫は
みなみにのみやこゝろひくらむ

なき世にも西をねがはぬとは、あやしきいひざ

まなり。世になき人の、ねがふねがはざるを、いかでか知るべき。さて、西をねがはぬとは、いかなる故ありてか、おぼつかなし。又、西東、北南、など對すべけれど、西南の對もよろしからず。

兼好法師

見ればかつ〳〵あらぬ言の葉は
　廣きまなびの窓につみけむ

薬師寺公義

今はとて思ひすてたる梓弓
　ひかぬその名もよにひゞきけむ

とるはうしとらねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり。この歌によられたるにや。思ひすてゝと、いひたらむには、ひかぬなどうちあふべけれど捨てたるにては、次のかゝりいかにぞや。さてゆべからず。またひかぬその名をとは語をなさず。

鹽谷高貞

かさねぬはうれしけれども小夜衣
　つまは我が身のあたとなりけり

一二句、かさねぬはうれしけれどもなど、をさなし。さて、師直こそはあだなれ。操たゞしき妻をさして、あだといふべきことかは。ことわり知らぬいひざまならずや。高貞の心には、さはおもはざりけむ。作者おのが癖心にくらべいふべからず。

本間重氏

魚さへもとりもはづさぬ矢先には
　和田の岬に立つ人もなし

魚さへもとりもとは、魚も鳥もといふなめれど、魚までとらむとの心ならねば、例のさへの詞詮なし。和田の岬に立つ人といへるも、空事なり。

み空とふ鳥も射とめし此の君の
弓弦の音の高くもあるかな

衝口漫言（九）

白松園主人

◎七年前の正月三日の夜

旅宿の喧しきと、沒情義なるとにわびて、こたびは、舊彦根藩士の家の、一室を借りて移りぬ。但し、この家は、嫗のことし七十にあれるが、獨住めるにて、此の地には、賄屋といふ者もなければ、止むことを得で、當分、余は、また自炊の昔にかへりぬ。

以前の騷しきには似で、こたびは、夜に入りて、人の聲だに聞えず、折々庭に落ち積れる桐の葉を、野鼠のがさ〳〵と音さするを耳にずるのみ。さはれ、此の屋の嫗は、こよなき念佛者にて、朝夕の二度は、木魚を叩き、鐘を鳴して、一時間ばかりの、南無阿彌陀佛を聞かしめらるゝが、頗るつゞきなり。これだになくばと思へど、そは、余りに借屋住居のわがまゝなるべし。今夜も、嫗の念佛濟みたる樣子なれば、行きて、念佛は、どの位樂しき者かと問へば、嫗、笑ひて、どの位と云ひて、これほど樂しき者のあるべきか、まことにあり難くて、合掌の間より、蓮糸の立つが拜まるゝなり。さるを、今の者たちの、念佛せぬが悲しきぞかしと、云ふもをかしくて、余は、おのが室に入りぬ。つれ〴〵なるまゝに、例の反古包をうち開きぬ。この包は、亡き父兄の、はかなきすさびに、書き棄てたる反古なれど、なつかしくて、おのれは、之を離すに忍びず、いづくの他國に行く事ありとも、必ず、携へずと云ふことなし。故に、此

のたびも持て來つるなり。特に、兄の死に至るまで、書きおけるものいと多くて、その苦學せしさまの忍ばしく、見るごとに、感慨おきどころもなし。

七年の前、こがらしすさぶ冬の頃より、余は、兄と共に、東京早稲田の奥、源兵衛村と云ふ處に宿かりてありき。こゝに書き出づるさへ、口惜しけれど、宿とは云へど、疊は僅三枚あるに、机もあり、飯櫃もあり、柳行李もあり、書物もあり、寢ぬる時は、机をはじめて傍に集めおき、さて、兄弟枕を並べ、足を縮めて、夜具さへあかりければ、人の見ぬまに、そと着物うち掩ひ、火ふき消してねにけり。此の家の翁は失せて、五十ばかりの嫗ありけるが、子供二人居て、長は與吉といへりけり。或夜、唐紙のあなたより、嫗は、余等を呼びて、さてそ徒然におはさめ、茶ひとつまゐらせん、こなたにきませと、云ひければ、余は止り、兄は、さらばと云ひて行きぬ。其の時のそゞろ語りを、うち聞けるまゝ、反古のはしに記したるが出でぬ。いと〳〵、はかなきすさびなれば、もとより、人に見せつべき者にはあらねど、昔忍ばしさにえ堪へで、そのまゝ、かいつく。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

正月三日の夜、あるじの嫗、へだてのからかみうち叩きて、何もするわざもなし、やう〳〵餅焼けたれば、物し侍らん、與吉も候へばと、しば〳〵促せば、もだしえで、襖あけて、かしらさし出しつ。見れば、まなごの與吉男もをり。近うといはるゝに、火桶ににじりよりて、やがて、すはまになりぬ。

この與吉男は、市に大工の主もちて仕へたるが、

正月の暇賜はりて、歸りきつるなり。さるは、今年廿二三にもや。れいの神田子の、むれの中にしも入りつべきわざものにて、物のいひざま、たちゐふるまひ、心ゆくばかりに、いと〳〵勇ましげなり。母の嫗は、皿に餅盛りて、ひざもとに並ぶれば、男は、胡坐かきつゝ、箸もとらで、二つのおよびしてうち食ふ。箸なんど無やくし、ゐやをつくろふ事かは、只、御心のまゝに、まゐり給へといへば、げに、箸してはわかかぬ様なり。あやかり侍らんとて、おのれも手してくふ。すべて、煙草くゆらしつゝ物語するも、鼻口より、煙うちまかれつゝたち出づるに、ひとしほ味よき心地し侍るを、餅頰にふくらしつゝ、すゝりあげつゝいふも、また、一しほの味ある心地ぞし侍るはといへば、かたはめきたることといひて、見さげらるるな。とて、嫗、笑ふ。市に居給ふれば、をかしき事ども、さはにあるべかんめれ。いかで、その一ふしうけたまはらんと、そゝのかせば、をかしき事もなし、このごろのざまわろき世に、と、いひて、まづ、我、國の處をとふ。なに長州と申し給ふか、親方にうけたまはれば、長州様、いみじかりしとよ。さては、その長州様の御國人にゐ給ふか、いで〳〵、さればこそあれ。かく遠き旅もし給ふ御心のほど、いみじさよ。うさもつらさも、旅ににますべき物こそなけれ。おのれ、たびといふものは、必ずすまじきものぞと、身にしみて、こはく恐ろしく、おぼえ候事こそ侍りしか。と、問ふと息つけば、そは、いかなるをりにか。と、いへば、なに、今より二年ばかり、昔の事にて侍りしなり。親方、さる弟子もちたり。この男、おのれらよりは、二つも兄なりけんが、手も人なみにおくれず、只、よくもわろくもあらず、つとめゐた

るに、半年ばかりして、ふと風の心地にて打ふしたるが、あやしく合はぬ事のみ、のり散らして、はては、なま物狂となりて、たち走りて、人の手にもあまるやうにありしかば、すべなくて、今は里へゐていなんとす。里は十里も隔りたる田舍にて、誰も知りたる者はなけれど、常に、自ら語りしさまを聞けば、家は、百姓にて、田も多く作りぬ。婢も使ひて、二親うちそろひて、あかぬ事もなけれど、そのさが、百姓を好まねば、をさなきより、大工のわざを習ひえて、かくは所定めぬありきするなり。されば、おのが心から家出したるなれば、いつにても、心のむきたらんをりは、まかりかへらんと、いひしかば、さばかり貧しくもなかるめりと、たれも思ひて、さて、ゐて行かんとするに、そこらの藥飲ませつる上、車、駕籠などやとひて、かへすべきにもあらずと、思ふ折から、

そなたざまにもて行くべき、調度などありけるに、それ積むべき車の片はしに、この男ものせてんとて、やがて、大八車のいと重やかなるたゞ中に、戸板たてまはして、その中にぞ、薦うち布きてすゑたりける。この物狂、太きやつにて、かゝる中には入らじといろふを、わりなく入れて、やがて、犇々といましめぬ。いましめられて、おう／＼と泣くもおかし。あな、あら／＼しのわざや。人の子をと、媼がいへば、げに旅にて、錢なき者の、病みたらん樣にこそありけれど、あはれがる。かくて、同じ弟子に、同じやうなる男二人と、おのれと三人撰ばれて、まだ、ほの暗きより起出で、晝食ばかり用意して、たち出でぬ。三人あとさきになりて、ひきにひきもてゆくに、ゆられながら、くいもりでゐして、たわごとのみいふを、道行人あやしみながら、過ぎがてにのぞき見つゝゆく。

いとかたはら痛し。ゆきとゆくほどに、手足いたく疲れて、物もはしうなりぬれば、茶店見つけて、車をば、すこし隔りたる道のほとりにすゑて、諸共に入りぬ。折しも、秋の最中なりければ、時雨ふり出でたるも知らで、ひろげ出してくふに、ふと思ひつきて、物狂にも物與へんとて、行きて見れば、時雨に調度のぬれたるに驚きつゝ、そとのぞき見るに、いかにしけん男は見えず、只、いましめたる繩ばかりぞありける。こは思ひ侮りてにがしたるぞ、いで引きずりこなんを、いづこに潜みをるならんとて、あなたこなた探しありけど、たえて見えず。向ひの畑の中に、さゝやかなる森ありて、祉見えたれば、あれにもやといきて見れば、祉の後に池めきたるものありて、そのほとりにたゝずみて、水鏡つくづくとこそ見ゐたりけれ。いかばかり、人を苦めんとする。このしれ者といひで、手をとりければ、われとても、物もくはず、雨にのみさらされてをられん物か、かゝるうき目見んよりは、身をもなげてんとてきぬるはと、いひで、そら泣きすれば、ことわりにもをかしくて、ゐてかへりて、物くはせて、もとの如くいましめ載せぬ。（次號へつゞく）

手紙のやりとり

蓼花

手紙のやりとりといふことについては、今や、學の園に參りつどはるゝ女學生の諸孃達にも、また、既に一家の主婦となりて、一家庭を主宰せらるゝ諸媛達にも、是非、御耳をお借り申したいことがあるので御座ります。と申したところで、手紙のかきやう、文字のつかひわけ、詞藻のたく

はへ方などを、かれこれとこゝに述べやうとするのでは、決して御座りませぬ。こゝには、手紙のとりやりについて、私の思ひついたところを、鳥渡御注意申せば、それでよろしいので御座ります。しかし、お話の順序として、文章、殊に手紙の文について、あらかじめ、申述べておかなければならぬ點がありまするから、先づ、それからはじめませう。

全體、世間一般に、文章殊に文といふことについての考が、先づ、根本において、大概は誤つて居りはしませぬか。こゝに、長々しく、それを辯駁する丈の餘白ももたず、また、その適當な場所でもありませぬから、たゞ、私の意見のみを申しあげますれば、思想を聲に發表したもの、即ちこれ言語で、言語を形に表現したもの、これ即ち文章で御座りませう。これは、私の獨創の見でもあく、また奇拔の申分でも何でもない。數千年のむかし、支那の聖人も、既に、辭達してやむと、申されてある。あれが、即ち文章の極意で無くて、何でありませう。それは、その意を達するについて、或は強くしやう、或は大きくしやう、などゝいふ點から、多少の道具立をほどこすのは、人々隨意のことで、敢て、他人の容喙すべきものではないが、要は、この道具立は、その末であつて、本は、達意にあると心得て欲しいのです。飾も飾だが、拙にまでつくと、そのために、却つて、本尊を沒了する恐があるから、第一に、本尊の在處を明にしておく必要があるので御座ります。

既に、かやうに考へてかゝれば、人間、話の出來る限り、思想のあるかぎり、苟も、文字を知り、筆のもちかたを心得た以上、文章のかけない道理はない。巧拙はもとより無いとは言はぬ。しかし、

文章のかけない筈は、決してない。若し、拙いからといふを理由にか丶ぬ樣な人は、虛榮心に滿ちた人で、見え坊の隨一と申すの外は無い。私共、かやうな人を相手にする暇は、不幸にして未だ曾て持たないが、苟も、否ざる人ならば、文章はどしどしと出て來る。飯の食ひたい、茶の飲みたいをいふと、何の點に就いて、相違がありませうや。若し、それで、文章がかけないといふ人は、恐らく、言ひかたがまづいから、腹がすいても、咽喉が乾いても、飯が食ひたいとも、茶が飲みたいとも言はないで、すます人なのでせう。狂者か、また仙人か、或は、白痴かでなければならぬ。

ですから、昔の文豪が、かやうな文句を用ゐたからとか、或人が、こんな辭を作つたから、あんなぞと、心配することは、決して無用で、他人他人の思想あり、發現あらむ。我亦我ありて存す。と心得れば、それで十分で、苟も、上手にならう、人にほめられやうといふ、劣等な心の無い限り、文章の書けないことなく、殊に、用を達するが主の、手紙のかけぬ道理はない。女子には女子の思想あり、言語あり、文辭あり。決して、男兒を摸するにはあたらぬ。今は、今の文辭あり。決して古人に泥まなくてよろしい。然るに、男子の眞似をしたくなつたり、古人の眞似をやりたくなつたりして、こ丶に、思想發現の途に窮して、餘義なく、文辭のために思想を枉げる。發現する方法が主になつて、發現せらる丶思想は、却つて客になつて、甚だ疎せらる丶。文章をかくに、困難を生ずるも道理よ。元來、虛裡實を生じやう、空中新に樓閣を經營せうとするのであるから。

要するに、天眞爛熳は、文章の美處佳處であるのを、その點をわすれて、僞善風の行爲に出で丶、

こゝに、全く、文章をつくるの能を失つてしまつたのでございます。言ひかふれば、文章殊に手紙をかくといふことは、元來、簡單容易であるのを、人々の虚飾心が、御苦勞にも、態々、難澁にして支まつたので御座います。僞善者覿面の罰も、亦、著るしいではありませぬか。

何故、私は、手紙を書くのを難かしがる人々を、かやうに罵りまするか。私とても、好むで人を惡しくは申たくないが、かやうなる人々の流弊、かやうな慣習の結果する所は、なか〳〵、容易ならぬので、爲に、人々の間の交際を疎からしめ、また、爲に、時々不德義な行爲に陷らしむるから、特に、諸孃の前に、その惡いことを極言して置きたいのです。手紙のやりとりを怠ることの影響は、男子よりは、殊に女子の方に於いて、多いので御座います。

男子の方ならば、外には出易い方で、大抵の事は、口頭で辯じても濟むのです。また、互に相會するときも少くは無いのです。これに引きかへ、女子の方であつて見ますると、何れかといふと、家のうちに在る方が多いので、また、多くなくてはならないのです。殊に、また、一旦身を夫に任せた上は、その身は相親しくしたものと、何時別れ別れになるやら、また、何時會ふやら、會ひがたいやら、會ひ易いやら、實に、不定至極です。その別れにつけ、會ふにつけ、手紙のやりとりといふことは、友達の間を結びつけるに、偉大なる效力を有して居るのです。

今更、女子の交友の重ずべきを說きますまい。また、あらためて、人の心のうつりやすいのをも申立てますまい。

しかし、如何に親密な間で、心と心と相契るこ

もあるにしろ、その相約した心と心とは、時と處とのために、周圍の狀況のために、寸毫の變化もなく殘るものたることを、誰れか保證しませうや。互に、屢々相往來した友と、暫時相會せずして、また、久しき後に相會つたとき、誰れでもよく、この間の消息を、會得しませぬか。かやうな微細な心の變化、それをして、遂に、二人の間の親密に、變動を生ずるに至らしめざるは、時々の來往遠隔の間では、書信の往復でありますまいか。手紙のやりとりは、事、微細なるに似て、その實、まことに微細でないとは、こゝのことで御座ります。

殊に、不德なのは、一方は叮嚀に往復を希望しても、他方は、一切それをせぬのです。一方に、返事を今や〱とまつにもかゝはらず、他方は、全く頓着せぬのです。その實頓着せぬのではない

が、兎角、筆重いのです。前申した虛飾心滿々なからで、一方は、遂に怒つて了うのでは御座いませぬか。

よしまた、交友のつなぎにせぬにしても、返事の入用な手紙に、返事せぬといふ人の多い樣です。これは、更にその罪のふかいわけで、待たせるものは平氣でも、待たされるものゝつらさ、これは、また一しほで御座ります。

書けば書くほど、手紙のやりとりを怠るの罪狀は、歷々わかつて參ります。何卒か、諸媛は、これまでもなく、以後とても、この點を心得られて、手紙のやりとりには、十分心を用ゐられたいもので御座ります。

殊に、未だ、學の園に在らるゝ方々は、文の稽古のときも多いことですから、よく、作文教師の訓誡を聽いて、平素から、その鍛煉をかさねてお

かれたならば、更に、立派なことであらうと思はれまする。

言ひすぎましたところ、言ひまはしの惡いところ、それ等を飾りたてる樣な、虛榮心や、虛飾心を、私は毫しもたないのが、私の特色とする所です。

苦樂一服（二）

吾水生

●秘法の秘傳は、あはれ一炊の夢と化しぬ。わが思ひたらむことは、之を公にし、人に問ひ世の評を求むるは、現今の狀態也。かくてこそ、初めて、人文の發達を促し、社界の進步を期すべきものなれ。徒に、三鳥三木を尊重せんには、遂に、固陋委微に終らむのみ。平安朝に於いては、秀才名媛頻に輩出して、艶麗優美なる文字、亦、豊富なりしが、鎌倉時代に降りては、遙かに之に比較すべくもあらず、是より秘法家傳起りて、一般の流弊となりぬ。ことに、和歌のごときは、定家一派に支配せられ、價値もなき古今の三鳥三木を、ことごとしくいひなし、敢て、他をして窺ひ知らざらしむ。其の弟子は、單に模型的傳授を墨守し、更に一步を進めて、獨創の見識ある人なかりき。さればにや、稀には、賞すべきものあれども、概して著書多からず、見るに足るべきもの少し。是、偏固なる思潮に負ふ所、實に多大にして、今は昔のことなりけり。

されど、こゝに所謂、禮法家と稱するものあり。いまだ、この風習を脱せず、各、その流名の下に互に相反目して、たゞ我流を以て尊しとし、正傳を以て自ら任ず。かくて其の敎ふる所、全く形式に陷り、最も、僅少なる所作の差別に依りて、其

流と稱し、その正否を爭へり。而も、極秘珍書を誇りて、曾て、之を發表せざるものありとかや。唯おのれは、その三鳥三木に類せむ事を恐るゝ也。もとより、所作の方法の必要あるは更なれども、遂に極端に走り、僅にその點に止まらば、是、禮法家にあらずして、寧ろ、禮術家といふを適當なりと信ず。

凡そ、道義は、意志行爲によりて價値を判ずるものあれば、其のあらはし方の良否によりては、大に人物の高下に關すれども、或は、美しき性情に基かずんば完全ありといふべからず。故に、聖勅に基きて、上は、君上に對し奉り、下は、各箇人間に於ける方法に至るまで、悉く、之を秩序的に說明して、倫理の思想を養成し、他面に於ては、或は、之を實行せしむる事を勉むべし。即、この兩者相俟つて品性を高尚ならしむべく、賢母良妻を養ふことを得るなり。これ殆ど、禮法家の任務にして、その責任の重きを思はゞ、宜しく、奮勵一番、倫理の一般知識を了悟し、我道德の據つて來る所を研究せざるべからず。極言すれば、その藏する好箇の資料を出して、之を正史に徵し、完全ある日本禮法史を編纂せむことを望むや切なり。單に、倫理或は歷史學者のみに讓りて、徒に古來の禮式にのみ執着せば、殷鑑遠からず、また中古以下の轍をふむにいたらむ。すべて、所作の仕方たるや、時代と方所によりて異る。奈良の禮式は今日の人に全く適すといふべからず、我國の禮式を以て之を泰西に施すべからず。各、事情習慣等に差異あれば也。我國の太古は、最も簡單ある禮式存し、社會益複雜となるに從ひ、禮法(禮の方法)も、漸く發達變遷し來れり。これ、全く自然の勢なりと雖も、其の根本たる禮、即、君子父子に對する禮等

をはじめとして、上下一貫したる大精神存し、毫も動搖することなかりき。されど、彼等は、此の區別を無視して、多くその仕方を、古昔の形式に則らむ事を勉むるにすぎず。實に、其の反省を促す所以この點に在り。況むや、秘法秘傳なるものをいふに於いてをや。

吾々を以て、從來の禮法を否定するものと誤らず、自ら禮に對する明確なる概念を認識し、併せて、日本禮法を深く尋求し、各國の粹を採りて之を補はゞ、今後の禮式を定むる何の難きことかあらむ。然れども、是、倫理學者のみの事業として、なほ、卑劣、頑迷、無氣力、また以前のごとくならば則己む。苟も、日本禮法が、おのが双肩にかゝるを顧みば、輕々に看過すべき事あらむや。速に、極秘珍本を發表して、大に、我禮法の光輝を放たしめ、社會の裨益を計らざるべからざる也。

敎の庭

十二月五日兼題

雪

天　神戸市南逆瀬川町　中澤よし子

やよひ山はなちるころのおもかけを
　あらしのさそふゆきにみるかな

評、雪を落花に見たるは多くあれど、かく耳だゝずして、おもしろくいひまはされしは、老錬のしわざなるべし

地　肥後國鹿本郡來民町　野口靜子

おこたらすこゝろの玉をみかけとや
　まおひのまとにゆきのつむらん

評、趣向新しからねど、極めて力あり。

人　日本橋區通四丁目　牛山素子

雪さわくつくはねおろしさえくれて

ふもとのさともみゆきふるなり

評、つくばねおろし身にしむこゝちして、雪景見るが如し。

甲之部

東京　赤尾かつ子

ふりすさふみゆきに枝はたわめとも
をれぬはたけのみさをなりけり
群馬　奥山花子

花もみちいかておよはむまつしまの
まつのこずゑにつもるしらゆき
下総　大木光子

ふみまよふ小野のしの原くれそめて
ゆきにゆくてをとふ人そなき
東京　近澤和子

おく霜に見まかふはとのゆきなから
わさめさやけきにはのおもかな
筑後　武田鶴子

乙之部

えたに葉にゆきはつもれと姫小まつ
ちよのみさをはかはらさりけり
山本よし子

ふれよふれ積れよつもれゆたかなる
としのしるしとめつるしらゆき
當間みすの子

あかつきのきたやまおろし音たねて
にはしつかにもつもるしらゆき
今井りう子

見渡せはたけのはやしにゆきふりて
すゝめのこゑもさやけかりけり
大久保伊野子

ふる雪もはると見ねけりうめか枝に
来なくうくひすこゑなのとけみ
菊地かれ子

たすまきてたれかゆかしくめてさらん
はなにまされる今日のはつゆき
椎野ぬき子

雪つもるみれのあらしのおとしきて
ふゝきに人もるまつのしたみち
椎野鋭子

ふりつゝくゆきにうもれてまつ杉の
したなれさへもおとたへにけり
北島功子

世のちりなしつめつくして野に山に
こゝろきよくも降れるゆきかな
衣笠澄子

松につみたけにかゝれるしらゆきは
千とせのはなといふへかりけり
飯村たき子

うなゐらはさむさもしらすおりたちて
ゆきなけしつゝあそふなゝしき
所賀崎久子

ゆく駒のひつめのあともたちまちに
うつめてふれる野路のしらゆき
松澤まつ子

なかなかに花にもましてうれしきは
むかつたかへにつもるしらゆき
岡田春子

我にはのまつのこすゑにおもしろく
ふりかゝりけりけさのはつゆき
平尾あさ子

けさみれはゆきかふひとの路たねて
ゆきこそへもれたにのいたはし

ふろ雪をはなとなかめておもふとち　伊勢村春子
　かたろけふこそたのしかりけれ

ふろ雪にくろしのまつも見えわかて　伊勢村花子
　あまもおふれやこきまよふらん

あけぬれと朝日もしはしうつもれて　岩田春子
　やまのはしろくつもろゆきかな

むらとりもれくらさためて夕くれの　山本梓子
　ゆきしつかなろやまもとのさと

いにしへの人にならひてこのゆふへ　田代綾子
　ゆきのひかりにふみをこそみれ

ときはきもなのみなりけりのも山も　河田伊志子
　けさおしなへてゆきのふれゝは

丙之部

うつみ火をとりかこみつゝのとかにも　秋岡れつ子
　ふりつもりたろゆきを見ろかな

もみ葉もちりてさひしきふゆ枯の　内田とく子
　木ことにゆきのはなそさきける

いつの間に雪はふりけむましろにそ　田川　みさを子
　にはの木たちもうつもれにけり

いつのまにふりやしつらんはつ雪は　三宅いそ子
　にはのくさきもはなやさきけろ

見ろまゝにかつ〳〵つもろはつ雪は　小川つろ子
　とはれぬにはとなりにけろかな

このあさけつま戸おしあけうち見れは　會田まつ子
　にはの小さゝにつもろしらゆき

今朝みれはむくらかまとの松か枝に　栗原まつ子

　はなと見ろまてつもろゆきかな

みやこひと來ても見よかし賤か屋も　關口きせ子
　木々のこすゑにはなそ咲きける

やま風に吹きよせられてまつか枝に　太田のふ子
　いとおもしろくゆきそつもれる

ふろ雪のいろはわかれとむめのはな　松山　かすゑ子
　かなりゆかしく咲きにけろかな

ふりつみし雪のあしたはうちかすむ　小野はま子
　はるひにましてのとけかりけり

昨日まて雪とまかひしゝらきくに　柴田のふ子
　今日はまことのゆきそつもれる

風さむみしくれとのみもおもひしを　宮地こう子
　けさしもゆきのはなそ散りける

すきまもろ風にめさめて見わたせは　堀内ふさ子
　木ことにゆきのはなそさきけろ

このねぬろ朝戸ひらきて出て見れは　仁村きみ子
　木ことに咲きぬゆきのはつはな

柴ひとのゆきかふみちもうつもれて　岩田よれ子
　みやまはいかにゆきのつむらむ

うめか枝にふりつむゆきはふく風に　向山まき子
　かをらぬはなのこゝちこそすれ

おきいてゝ庭のわたりをなかむれは　村田きみ子
　はなにまかへろゆきはふりけり

まとのとをあけてし見れは庭のおもに　木村とめ子
　いとめつらしきはつゆきそふろ

れさめたろ弟いもとのよろこひに　鴻巣とし子
　起き出て見れはゆきそつもれる

寒るなもしはしわすれてひとみなの
めづるはつゆき降り出てにけり　河村すゑ子

ふゆもはや深くなりけむわかにはに
けさめつらしきゆきを見るかな　杉山君代子

見わたせば木々のこすゑは時ならぬ
ゆきのはなこそさかりなりけれ　清水てふ子

梅か枝にまだらに降れるはつゆきは
またきはなさくこゝちこそすれ　飯塚まつ子

賤かすむわひしきいほもへたてなく
きよきこゝろにふれるしらゆき　柏木はとね子

おき出てゝにはの木立をなかむれは
はなかとはかりゆきそつもれる　加藤けさ子

ふく風にちりくるはなとみるまてに
にはもましろにつもるしらゆき　吉川なか子

みよし野の山路もしろくなりぬらん
みやこもけふはゆきのふれゝは　増戸そて子

いつの間に降りつもりけむ初み雪
木々のこすゑははなと見るまて　金井ゐき子

庭のおもにつもれるゆきはときならぬ
はなともみねてうれしかりけり　安藤ひさ子

さ夜中のあらしはたねてしつかなる
には眞しろにそゆきはふりける　幸徳千代子

雪ふれはたにのほそみちあとたねて
訪ふひともなしみやまへのさと　中村りき子

ふるゆきにつま木こるへき賤の女か
行くやまみちもうつもれにけり　金田とみ子

ゆきふれはしろしみ松も見ねわかす　瀧山みゑ子

いつこのみやとさしてゆかまし
みやこひとたつれゆくらむよし野山
はなのさかりにまかふしらゆき　岡田まち子

夜もすから降りにし雪にくれたけの
ねたもたわゝにけさは見ねけり　國府田はる子

ふみまなふ窓おしひらきなかむれは
はつかにふれる今日のはつゆき　正木たて子

みなれたる賤かふせ屋もけふのみは
たましくにはと見ねわたるかな　丸城さなり子

さく花にまかふもうれしわかやとの
こすゑにつもるけさのしらゆき　沼井あい子

やま里の水のしたかけに散りしきし
くち葉かうへにゆきそつもれる　足立こう子

あさ毎にしもをそれかとまかへつゝ
まちにしゆきそふりいてにける　藤波たま子

ふりしきる雪そさやけきひとこゝろ
なへてかくこそあらまほしけれ　佐藤わき子

くれたけの枝もたわゝにしらゆきの
けさめつらしくふりつもりけり　今井たい子

學ひやのまとにふりつむしらゆきは
ことにさやけきこゝちこそすれ　永井あき子

いくちよをかけて降るらむたかさこの
をのへのまつにつもるしらゆき　北島操子

吹すさふあらしはゆきにうつもれて
あしたのとけきあらゝまつはら　木村芳雄子

ふつくゑに埃かと見ねてふりくるは
まなひのまとのけさのはつゆき　山崎かめ子

しらゆきやふりつもるむかせもなき
夜半にきこゆるたけのしたをれ　椎野秀子

めつらしとめてはやしつるしら雪の
ひかすと〻もにふりにけるかな　椎野瀧子

さきそめし梅のこすゑもうつもれて
そこともわかずにほふしらゆき　椎野清子

朝戸あけて見るもさむけししらゆきの
にはもはたらにふりつもりたる　稲原菫子

うなゐらかよろこふ聲にさそはれて
いつれはにはにはつゆきのふる　三木ふさ子

はるあきの花にもみちにさしつきて
めつらしと見るにはのしらゆき　桑原とよ子

今朝見れは松のすかたもうつもれて
まかきのたけそゆきになれふす　川巾千てつ子

身にしみてさむき朝けに見わたせは
四方のたかねにつもるしらゆき　竹村竹里子

つもりにしちりも落葉もうつもれて
おもかはりせりゆきのあさには　永井さい子

朝なく〱見なれし木々もゆきふれは
わかにはなからめつらしきかな　關　勝子

ふきすさふみれのあらしのおとたえて
やま〻つかねにつもるしらゆき　名木山かつ子

朝ほらけ四方のやまのは見わたせは
木ことにゆきのはな咲きにけり　金津文子

駒なへてゆきかふひとのあともなし
いやふりしきるゆきのやまみち　安井きやう子

みせはやとおもふ心のたねにしは　安井みし子

あとつけかたきにはのしらゆき

こん年のみつきもしろくあふき見る
たはらのやまにゆきそつもれる　坂本豊子

見渡せはちさともはれて世のちりを
うつみはてたる今朝のしらゆき　山田婦美子

みよしの〻よしの〻山にときならぬ
はなと見るまてつもるしらゆき　青木たま子

みこし路のこしのしら山いかならむ
みやこもけふはゆきにこもれり　篠田園子

ふりはへてとふひとあらはいかにせん
ふま〻くをしきにはのしらゆき　佐藤枡子

あきらけきわか大み代にしらゆきも
ひかりをそへてふりつもりけり　見永さい子

たかくひく〻つもれる雪はつよくよわく
吹きくるかせのわさにやあるらむ　京野さき子

さむさをもわすられにけりはなと見る
あしたのにはにふれるしらゆき　羽田榮子

友つるのあそふすかたに似たるかな
尾のへのまつにつもるしらゆき　岡田美貴子

にこりつる浮世のちりにそみもせて
きよくつもれるみれのしらゆき　岡田春子

あれはてしかき根も見ゐす朝戸出の
にはおもしろくゆきふりにけり　日高かす子

賤かやもたましくにはのこ〻ちせり
かとへのゆきをひとしふまれは　戸賀崎治子

とよとしのみのりもしろくふりいて〻
いともめてたしけさのはつゆき　依田くに子

冬がれのこずゑのはなと見るばかり
つもるもうれしけさのはつゆき　荒野たね子

しらゆきのふりしあしたはまつしまの
まつのこずゑもはなやさくらむ　内田さた子

わがにはのいけのみぎはやこほるらん
しづかにつもるけさのしらゆき　大槻まつめ子

今すこしふらまほしくもおもふかな
つもりもやらぬけさのはつゆき　小川たき子

朝しもに似かよふほどのいろながら
あはれそふかきにはのうすゆき　桝田登子

しばの戸は拂はぬまゝにうづもれて
ゆふへさびしくつもるゆきかな　中村いそ子

しらゆきをまとにあつめて文よみし
むかしのひとぞしのばれにける　松村あさ子

冬がれしにはのけしきもこのあさけ
めづらしく見るゆきのはつはな　穂積稔子

冬の夜のあらしはたねてしづかにも
けさめづらしくゆきぞふりける　宮田けい子

日にそへてあれゆく庭もゆきふりて
かれしこずゑにはなぞさきける　隅田よし子

冬がれてひさしきにはもはるめきて
木ごとにさけるゆきのはつはな　川村まつ子

いと清き世とはなりけりゆきふれは
ひなもみやこもしろたへにして　杉浦いと子

枯れふせる尾花もゆきのしたならん
なへてしろくも見ゆる野邊かな　吾妻ちか子

枯れはてしのへのち草のあと見せて
またらにつもるけさのはつゆき　中舘やう子

めさましくつもりにけりとあさ床を
はやくはなれてゆきを見るかな　横田秋子

けさみれは松のはしろくつもりけり
きのふはとほきみねのはつゆき　横田音羽子

老の身のこゝろつからかふるゆきの
かしらにつもるこゝちこそすれ　早川のぶゑ子

なにごともつもれは深くなるものを
おもひしれとやゆきのふるらむ　古瀬りく子

かしましきしぐれあられの晴すぎて
あさけしづかにつもるゆきかな　重原はる子

あたらしく作りしやとゝ見ゆるかな
ふるきのき端もゆきのつもりて　佐野たま子

うちひさすみやこも雪ぞつもりける
さむきやま路はいかにあるらん　林くに子

色かへぬときはのやまもふゆはなほ
きごとにゆきのはなぞさきける　鏡山滑代子

大御代のゆたけきさまはめづらしく
ふりつもりたるゆきにこそしれ　田代浩和子

うなゐらが寒さわすれてつくりてし
ゆきのおきなぞおもしろげなる　中代艶子

散りしきていろも移らぬもみぢはの
うへまたらにもふれるしらゆき　山田いね子

なよ竹のなびかぬほどにつもりけり
にはおもしろきけさのうすゆき　山田よね子

十二月五日兼題

燈下讀書

地

長崎市西山七十一番地　日高かす子

木枯寒う吹きすさびて、夜いとう更け行くまゝ、音つるゝ友もなし。徒然のあまり、怠りかちなる文机の塵うちはらひ、眠れる燈をかきたてゝ、昔、物學びせし折、筆のすさびにうつしたる、古人の文の數多あるを、ほごになしはてんも口惜しと思ひ、文箱より取出で、折からのよき友と讀みもてゆけは、何れも聞えたる大人たちのものせられし、唐大和の言の葉にあん。武士の道のいさぎよき論をはじめ、女の道のしをりなつかしく匂ひたる、限りなう心ゆく中に、「一室の内に居て、天下四海の内を見、天地萬物の理を知る。數十年の後にありて、數千年の前を知る。今の世にありて、古の人に對す。我身愚にして、聖賢にまじはる。是皆、讀書の樂なり。」とあん、貝原ぬしのいはれたる一ふしを、今宵たうてたる文箱の底の寶とこそ思ひしか。あはれ世の、いとなみのいとまあみ、文をも筆をも捨てし身の、怠りのうちかこたるゝにつけて、螢もからず、雪もたのまず、大御代の光くまなき燈火の下に、道の奥をもふみ見らるゝかたじけあさを、わすれたらんやうこそはづかしけれ。げにいまよりは、この大人たちの文を友として、春雨のつれ〳〵ある夜も、月見るほどのみじかしとかこつ夏の夜、はた、虫の音の更る長き夜は更なり、埋火の下したはるゝ冬の夜すがら、學はてんやはと思ふ心つきたるも、文よみしたまものありけりと、をしいたゝかるゝになむ。

人

神田錦町一ノ二〇　名木山勝子

ひたぶるに、うしとのみ思ひはて、かこちしものから、何とあう、惜しまるゝ秋も、柴の戸叩く時雨に、くれゆきて、はやも冬は來りぬ。眞玉とそそぐ白露は、白う霜と置きかはりて、あはれや、野邊は、千草の色うつろひはて、山邊には、龍田姫の千染の糸や亂れけむ。色もあせ、吹きすさぶ夜半の嵐に、かつ〳〵散りゆく姿、あはれなり。さらぬだに、夕暮のさびしさ、田づらに、案山子の笠はとばされ、蓑は破られつるが、夕日なゝ

めにうけて、はかあげにたてるをり、遠山寺の鐘のね、かすかにひゞき渡れる、あるは、閨寒き夜半、月に叫べる猿の聲あど、いとかあしともかあしうこそ。かゝるをり、いかに待てばとて、とひくべき人もあらぬふせいは、さゆるふすまに、長夜をかこたんよりは、心静かに文よまむこそとて、やをら燈かきたてゝ、白うありつる埋火をかきおこしつ。文机のちりを拂ひて、ふみとりいで、そこゝとよみはじむる程に、おのづと心もしづまり、夜のふくるも知らで文の林を分け入るに、はしなくも、名高きかの紫式部が、石山寺にものせしくだりとありぬ。あはれゆかしき、式部の君がわざと思ひつゝも、すゞろ、おのが越方行方の事あど、胸に浮びつ。あらはづかしや、此の開け行く大御代にあひ乍ら、我のみひとりおくれて、あがれる世の君達がもすそにも及ぶことのおはけあきは、あな。あど物思ひつゝしばし時をぞ移しける。やがて、油やつきてん、燈のかげ、くらうなりぬるに、ふと心づけば、長かりし夜も、はやふけ渡りて、「草木も眠るといふ頃となりければ、いざやとて、文を收め、燈打けして、伏戸に入りぬ。されども、さまぐの事など忍ばれて、ねられぬまゝに、さしよりて、窓の戸おしあくれば、木立あらはに大地にもれさす月影の、すさまじきばかりいよゝさえゆきて、淋しうも、はらくと散りしける楓の梢にあり。木枯の音のいと身にしみて、折しも、ひゞく遠山寺のかねのね、いともかあしや。

かの石山寺を、てらせし月かげも、これよこの月かも。

(以下原稿到着順)

中村伊曾子

松風に寺々のかれの音も、ほのかにきこゆ。折しも吹きおろす木の葉の、やり戸にさわぐこそ、いみじう身にしみてさびしけれ。文の林のしるべぞと、つれより光り増れる燈火も、つぎくにほかげさびしくなりゆくに、そたかきなしつゝ、ひとり文机にうちむかひたるは、ねも言はず、心すみわたりて、目もはれぐとれむたさも知らず、ふみ見もてゆくに、さき讀みたりしあたりの、心にはとゞまらぬふしぐも、ひときは、自づからときほらるもうれしけり。あはれ、心ゆくまにくよみもてゆくに、實に、遠き世の人の心も、まのあたりかよふこゝちして、あはれなるも、あるは、なかしきくだりくも、言ひ知らず身にしみて、心もすがくしうなりゆくに、燈の光りほそくなりにければ、油さしそへつゝ、しばし、あかくなるもなかしうこそ。

かゝげつゝふけゆく夜半の文机に
てらすともしのかげぞさびしき

林くに子

今日は糸針の仕事も、漸々に仕まひたれば、今宵は、久しぶりに、古書共ひもとかばやと思ひ、日頃好める女訓書など讀みゆくほどに、夜はしん〳〵と更渡り、あたりも、いよ〳〵靜まりかへり、只、遠く聞ゆるは、岸うつ波の音のみ、身にしみて、何となう物淋しく覺ゆ、そゞろ、過にし昔の忍ばれてわれおさなき時は、文讀むひまのなきにもあらざりしを、如何なればあそびくらしけむなど思ふも、いみじう口惜しきはみになん。昔、支那に、車胤と云へる人ありき。家貧しくして、油買ふべき錢さへなく、夏の夜には、數多の螢をあつめ、其の光にて、書をよみきとかや。又、此も、支那の某學者にて、同じく赤貧洗ふが如く、冬の夜には、雪の白きにすかし、書を讀みしとか。かゝる苦學の結果、何れも學者とて、後世にまで名を殘すに至りき。我國にては、新井白石など、世に知られし學者にて、毎夜えん端に出で、書を讀むを常とし、眠を催せば、冷水をあびて眠をさまし、又、體のあたゝまるにつれ、眠をきざせば、又前の如くし、斯する事度々、遂に業を終へ、世のうやまふ所となりぬ。かゝるためしのあるものを、まして、女子教育の盛にとなへらるゝ今日、如何で、たふとき日を、あだにすごさんや。畏くも、皇后陛下の御歌にも、時計の針の絶えまなく、めぐるが如く時のまも、ひかげをしみてはげみなば、如何なる業かならざらん。とよませ給へるも、實にことはりなりと、心の底にとゞめつゝ、ひるは家事のこと、何くれと調べ、日もとくらめば、燈下にうづくまり、古書に、女訓書に、或は雜誌など讀むを、こよなき樂しみとせり。ちりも積れば山となるのたとへもあり。夜々、わづかながらの讀書も、よし、世にきこゆるまではなくとも、せめて、身を修めんたすけにもと、つとめはげみつる。

岡田春子

晝のほど、いで給ひしせの君、今宵は、常にもあらで御歸りの遲きは、いかにしたまひけん。用事多かる御身の、未だすみ給はぬにやあらん、など思ふほど、夜もふけぬれば、家の人など、皆いれさせて、ひとりともしびのもとに、まつまもいとつれ〳〵なれば、かたはらなる文机ひきよせて、文よみそめぬ。家のわざのいそがはしさに、常はとりいでゝも見ざりし雜誌など、くりひろげつゝ、見るに、女德の道、のこるところなくかゝげられたる、身にしみて、まづうれし。あるは、國語に、漢文に、さては、地理歷史など、面白うかきなされたる、そゞろに古の思ひうかばれて、なつかし。殊に床しう思ひやられたるは、和歌集なりき。まことや、稅所敦子の刀自ならねど、三度のいひよりもと思ひわたれる道なれば、よしや君のごと、今、式部の名は負はずとも、せめては、言の葉の道の奥なる、淺香山のかげをだに見ばやと、思ひおこしつれど、しばしだに暇なき身の、今日まで、むなしう過しぬることの愚かさよ。あはれ、苔の下なる敦子の刀自、心あらばいかに笑ひ玉ふらん。など、いたうやさしき思ひに、くりかへし、まきかへし、よのふくるをもしらで、よむほどに、己れは、いつしか敷島の道深うわけいりし心地して、氣もすみ、心もさえ渡りぬ。あはれ、樂しきこよひの讀書よ。さるにても、せの君はいかにし玉ひけん。己れが、かくたのしき讀書に耽り居るともしらで、此のよはまで、御つとめに心を勞したまふらんを、いかで、かゝる事にのみ耽りてやはあるべきなど、思ひかへして文打ちおほひ、せめてはたちぬひのわざをだにと、ひとりごつ折しも、からからと車の音して、やがて歸り玉へるは、我夫なりき。あはれ、文机の上なる文を見て、何とおぼし給ひけんと思へば、まちわびし嬉しさも忘れて、心のみこそいためられしか。

桝田益子

吹きすさぶ簷の松風の音、時雨とふりしく庭の木の葉の音も、呉竹のよそにきゝなし、静なる文やのすびつに、埋炭さしつぎ、梅が香くゆらせて、机の島に、書ども磯の眞砂の數々とうでゝ、あさるとすれど、渚におふるよしあしもわいだめはず、千尋の底の深きことわりも知られず、いたづらに、濱しほのみかきつむるは、かひなしや。さは云へ、石上ふるき世にも、螢雪を集め、また、某といふ昔を讀みて、うたゝ、過ぎ來し方を歎ぜし公のためしもありぬときけば、め刈り、鹽やき、いとまなき海人をとめなりとも、大海原の如く、ひらけゆく此の大御世に、生れあひぬる身の幸に、あしまの蟹の横はふ文字までも、學の道に、八重のあら波くぐりても、いそしみにいそしみ、つとめにつとめて、あはびしら玉かづき上ではやと、獨りごてば、更け行くまどの燈火もまたゝき、小瓶にさしたる梅が枝もほゝゑみて、いさめがほなるもあはれ深しや。

和田つみのふかき心にいそしまは
そこのま玉をはすあらめやは

関 勝子

今宵は殊に寒し。とくとく、ふしどに入れよと、日ふめる母樣の御聲の聞ゆければ、はいと答へまゐらせて、後の柱時計を見やれば、九時をうたんとするところなりき。早、母樣はふしどにやおはしましけむ、今までもれし話聲は、はたとやみて、唯、ばゞ樣のしはぶきのみぞ、折々きこゆる。其の靜けさ云はん方なし。折から吹きくる木枯寒くみにしみければ、あはれ、つとめてこそは、野山もなべて銀世界にならんとやすらめと獨ごちつゝ、燈りかき合せて、やうやううすれゆきし燈火かきたて、倚、よみさしの書誦しゆけば、あはたゞしく、ねよとの鐘は我をおどろかしぬ。夜は、次第々々に更け行くまゝに、心はいよいよすみまさり、ひたよみによみゆく程に、彼の、尊氏が、己れの意の叶はざるを憤りて、おぞくも、朝廷にばうはんせし所なりけり。我は、且、憤り、且、のゝしり、はては、よゝとこそ音に泣きしか。折しも、時計は二時を報じぬ。おどろき見出せば、燈火は、尚明々とさながら、物に動き安き我心を、あざけるらむやうにみゆめりしは、中中に我ひがめなりしか。

佐々有鄰子

詞花和歌集の雑下に、太政大臣の歌あり。おもひやれ心の水の淺ければかきながすべき言の葉もなしと、詠め出られたまひぬるも、うべなりけりな。ぬば玉の夜のふくろまで、文案にむかひ居ても、心の水の淺ければにや。何ひとつさとり得ることもなくて、燈のねぶれば、共にねぶりをもよほして、股に錐してもかひなきは、意馬のくるへるなるべし。いかにくるふとも、意の手綱ひきしぼり、一鞭たかくうちくはへて、々林ふかくわけいり、神典の奥かなきはめてんものと、瞽詞を、學窓の控聲とはなしぬ。

福原菫子

霜にさゆ行く山寺の鐘ものすごう、木からしの風吹きしく冬の夜、燈火をかき立てゝ、古人の殘こし置かれしふみひもときて、讀みもてゆくに、女子の踐むべき道のふしぶし、いとも淳に、いとも詳からに正しうかき綴られたる、くりかへす毎に、心氣は爽やかに、燈火はあかやかに、身の光りとせよと、てらすがごとく、まばゆきまでにさはわたりて、そゞろ、寒けさも打ち忘られぬ。されば、四季の中、いつはあれど、冬の夜の、燈火の下にいそしみ、貴とき教を讀むばかり、樂しきことはあらずかし。時は早や、さし櫛の曉方になりぬらん。鷄の聲におどろかされて、窓の戸押し開らくも、おかしや。

椎野秀子

おのれ、かねてより、かの日本紀の局のものせられし文をこのめるからに、今宵雨夜のつれ／＼に、燈火あかうかきたてゝ、文机に向ひ見れば、いみじう心もさはまさりて、晝見しあたりの、なにとなう心なかりしも思ひ出されて、深き心あるふし／＼も、おのづから、解き得らるゝも多し。なほ、ねむたさも覺えざれは、いまひときはは、げまばやと、燈火のあぶらさしそへつゝ、見もてゆけば、實にや、遠き世の人と、まのあたり語らひたらん心地して、なつかしさも、おぼゆるに、まして、世のおみなの、ふみゆくへき道の、ふし／＼、いとこまやかに書きつゞられたる水茎のあと、ひとしほゆかしさまさりけり。あはれ、かばかりおみなの道を盡したまへる局の心や、いかばかり正しかりけんなど、思ひめぐらせば、いとゞ我身の怠りもかこたれて、とやせんかくやせんと思ふ折から、霜夜のかねの、耳にさしあてたらんやうにきこゆるにおどろき、小窓のとぼそさしのぞけば、よひのまの雨もとくやみて、永き夜半もあけちかきにや。有明の月のさしのぼりたるに、しばしはとて、打ねむれども、夢は思をはなれずなん。

飯村あき子

秋はかなしきものとのみいへど、みねの松かぜ音立つれば、かけひの水、流れをとゞめ、しろき霜のおち葉が上をてらしつゝ、深山にさけぶさを鹿の音も、やう／＼消え行く、冬のさびしさこそ、なか／＼にかなしきものなりけれ。

さはれ、このさびしき、いともかなしき冬の夜に、なす事もなうすごす人々は、しばらくおきて、われ等の如き、末とほき學びの林をたどり行くみは、かゝる折こそこよなき時にならめ。たま／＼ひもとけば、かの平家物語忠度の都落の一ふし、あなあはれなる忠度は、いかにしきしまの道に心をいれ給ひしか、かゝる人心さけがしく、民はやすき心のなき時にあたりて、いかにやさしくも、文に心をそゝがれけるかなと、そゞろに、そのかみのしのばれてありけるが、たとひその身は、勅かんの事なればとて、かぐはしき名は、千代に八千代につたはらめなど、思ふ間に、いつしか夜もふけ行きて、ともしびは消なんとして、かすかなる光を放ち、時計の針のひゞきさへ、さやかに手にとる如く、あかう起り居し火も、いつしか白ふ灰となりて、すき間もる風は、いよ／＼さむく、犬の聲さへいとかすかなるは、いかに夜ふけし事ならむ。いざふし戸にいらんとて、あまど一つおしひらけば、寒月一輪、はてなき空によこたはりて、冷かなる光は、水の樣に、見渡すかぎりは、白絹しきたるが如し。あな、心地よの冬の夜やと思ふ折しも、上野のかねは、此のせきばくを打ち破りて、二時をつげぬ。いざとくいれんとて、ふしどにいれば、梢にのこる木の葉、はら／＼とまどのとをおとづれぬ。

篠田圓子

今年は、めづらしう、萬、手まはりよくして、秋の初めつ方には、早、寒さの支度も悉くなしをへければ、いでや、かゝる折にこそ、かねて、あつめおきたる書どもしらべむものと、やをら燈火かきたてゝ、そが中のたしなみの道の一卷をひもときそめにけれ。一枚二枚とよみもてゆく程、恰も、胸に針うたるゝが如く、おのづから、面赤うなりぬるやうおぼゆるは、何故なりや。是我が行に至らぬふし多ければなるべし。あはれ、其の昔、燈火なうして、雪をつみ、螢を集めて、物學びしけむ人もありとかきゝつるを、親のなさけの、あたゝかきしとねの上に、明らけき、ともし火控へて學ぶ身こそ、いかに幸多きことならめ。されば、此のふみの中なる、貞女孝女の德をしたひ、己も誠の人となりて、たらちねの深き恩に報い奉らでやはあるべき。折しも、夜や更けにけむ、あたりいと閑けくなりて、はる

かにきこゆる辻占うりの聲、いとあはれなり。細く、らうたき聲なるは、未だ、としはもゆかざるならむに、あはれ誰が子ぞ、親はなきにか、しからずば、重きやまひの床にや打ちふしぬる。とやかくやと思ひめぐらすうちに、いつか、また〳〵きこえずなりて、うら山の森に、ねよとの鐘の音ひゞきわたりぬ。

君野靜子

よいの間より降りつゞく時雨の、とう人もなき柴の戸におとづれて、風のたよりにさそひくるきぬたの音、かすかに聞え、四隣の萬籟聲をおさめて、人の心もおのづから靜まる時、ひとり燈火の下に、書を繙くばかり、世に樂しき事はあらじかし。博く古今の大家と交り、遠く、東西の偉人と語り、たふときひじりの御をしへをうけ、深く堅にしづみし身も、一道の新しき光明に前途をてらされ、立つて百難に處し、婦德を全ふせんと感奮し、あぢきなしとかこちし身も、今は、なか〳〵賴み多く、ます〳〵けみして、深く其の妙を味ひ、時の移るも知らでありしが、いつの間に入りきたまいけむ。母上の、夜もいとう更ぬ。身のために惡しからん。早くいねと、例の厚きなさけのみ言葉に背かんよしもなく、本意なけれど、書をとじんとするをりから、又もや、ふりしきる時雨の、木の葉を誘ふ音いともの凄し。

依田みに子

この開け行く御世に生れいでたるは、いと〳〵幸なることにこそあれ。されば、人々先を争ひ、學問をはげみ、ひたすら、人にまさらむことをきそへるに、おのれ、田舍のならひにて、ひるは、なりはひもいそがはしきからに、文よむひまも少ければ、たゞ、燈下にて書讀むを、何よりの樂みとなしぬ。かく思ひなりぬるも、皆あつき師の君の力になむ。まして夜になりては、あたりしづまり心も散らず、何事も覺ね安き心ちせられ、まことに、これほど善

きことは少かるべし。世の開け行くにつれて、色々の書ども得られつべく、又、如何ほどかたき事習はんにも、師の君おはせば、自から、智を求め德を修むる事をうべし。此の頃親しき友と打まとひて、讀書會をもよほし、かたみに、問ひ敎へつゝ時の過るも打忘てなん。

松澤まつ子

おのれ、ひとのうちは、家の事しげくて、書讀むひまなどはしばしだになければ、夕げ終りて、奥の一間に心靜にともしびの下に書讀むを、此の上なき樂みとはなしぬ。更く行くまゝに、あたりはいよ〳〵靜けく、空には、くもりなき月、いよ〳〵淸くすみ渡り、心もいとさえ〳〵しうなりて、思へをみだすものとては更になければ、讀みもて行く書くも、書く文字も、一々腦にしみこみて、人の行ふべき道にまれ、物の理にまれ、おのづから悟らるゝ心地す。あはれ、書の林をいよ〳〵奥深く分け入らんには、燈下の讀書に、若くはあらじかし。昨日今日、例の燈下したしまるゝ時節となりぬれは、親しき友どち打集ひ、學の道たどらんとて、よべ、心ばかりの會の始めの祝ひのむしろ開きけるに、我が祖父の君、御身等に聞かする事ありとて、笑ましげに入り來給ひて、扨、仰するやう、我身幼かりし頃は、智ある人、能ある人、少きが上に、印刷といふ事のなければ、中々に、一冊の書物だに、容易には得られず。さるに今は學ばんと思へば、如何なる書物にてもあり。敎へを受けんと思へば、何處にも、智ある人、德高き人、おはしますいとも有難き大御世なり。又、御身等が夜々たのみとする燈も、昔は、あんどんなどにて、そが光もおぼつかなく、文讀むにも、裁ち縫ひの業するにも、いたく目を勞せしに、明けく治まる御世と諸共に、燈もいよ〳〵明になりて、書讀む御身等の心を、ます〳〵明になさしめんと、つとむるなり。あはれ、御身等も、

すでに知らるゝ如く、螢の光窓の雪に、書讀み給へ。やがて、にほひ出で給ひし君すらもおはするものを、大君の深き御めぐみと、父母の情けに由りて、何一つ、足らはぬ事なき御身等は、たゆまず勵みて、才を磨き、徳を進め、深き御恩の萬分の一だにむくい奉らん事を、常々忘るべからず。となんいとおだやかに、斯仰する折しも、月影くまなき空に、雁のなき渡るも一入身にしみて、心のそこ深くきざみこまれぬ。

樂園

天津籠城中の鄭夫人（四）

森林生記

鐵道總辦唐紹儀の夫人は、足を切斷することを、漸く納得致したから、乃で、彈丸の來ない透を見計ひ、擔架に載せて、日本領事館へ連れて參りまして、それから、軍醫は切斷の手術を施しましたが、濱子夫人は、懇に、世話をして遣りましたので、彼等の喜びは、一通りではなく、露西亞人の不信切に引代へ、日本人は義俠懇切にして、世界に、日本人ほど義に厚き國人は無しと云つて、大尉、日本の恩義に感じたさうである。

茲に一ツ、可笑い滑稽話があるが、餘り眞面目なことばかりでは、讀者諸孃方が退屈すると不可んから、記者が、天津領事館で、西村捕君から聞いた話を、チと馬鹿々々しいことではあるが、書いて、令孃方のお慰みに供して見よう。それは何であるかと云ふと、此の時、天津居留地に居た、日本人の床屋は、三人であつたが、其の中にも、島田豐吉と云ふ男は、中々の任俠家で、籠城者は皆、此の人を讚めて居た。何故なれば、六月十五日から、商人は、大概店を閉めて了ひ、他の理髮師は、稼業を休んで了ふ中に、此の島田豐吉と云ふ男ばかりは、彈丸の屋根上を通過する最中、平

然として店を開き、客を取つて居たのである。それで、門口は、唐紙へ金釘流で、大きく左の如くに書立て、貼出してあつたさうだ。

人助けのため、平日の代價にて、顔剃り、髮刈り致すべし。

大日本帝國理髮師　島　田　豐　吉

些と可笑い字句であるが、事實ゆゑ、其の儘に飾りなく記して置くので、此の島田も、少し毛色の變つた人間には違ひないのであつて、日本人が顔剃りに行くと、喫飯最中でも中止して、直に剃つて呉れるさうである。

島田理髮師が、西村博君に向つて云ふには、私は、此の鐵砲彈のドシ〳〵來る中で、稼業などを致さなくても可いですが、之れも、マア、一寸人助けですもの、それで行つてをりますので。」

と、恁う云つたので、西村君が、

「それは、人助けも人助けだが、併し、斯う云ふ時が、稼業の儲け時ではないか、幾等高く取つても、時が時だから、夫だけの價値はある。お前も儲かれば、お客も助かるから、一人も苦情を云ふものはあるまい。唯、床屋が稼業をして居ると云ふだけでも、客は有難がる譯だから。」

島田豐吉「エヘ、、、、幾等高く取つたつて、命懸で取る金にしちやア高が知れたもので、提灯に釣鐘で厶いますから、損得づくじやア引合ひません。それに、恁うして居たつて、今にも殺られて了ふかも知れませんから、死んだ後まで、利欲のためにしたんではない、眞實に、人助けにしたんだ、流石は日本人だと云はれたいんで……。先生の前ですが、玆が即ち、日本人だらうと思ひます。」

西村「感心々々、君は、如何も膽力と云ひ、氣力と

云ひ、實に恐入つたものだ、商人の側から見たら、機敏とは評せまいが、君の云ふ如く、茲が日本人の日本人たる所で、何とも云ふべからざる味ひがある。誠に善い心掛だ。」

島田「爾うお讃に預ると、却つて恐縮して了います。聞けば、領事の夫人は、襷がけで、看護を爲さッたり、炊事のことまで、御盡力なさつて居るさうですが、御婦人の身で、感心なものですねい。それを思ふと、私などの恁うして居る位、何でもありやァしません。」

西村「濱子婦人は、實に感心なものだ。マァ彼等が、女丈夫と云つても過言でなからう。」

と、話して居るところへ、佛蘭西人二人と、露西亞人一人とがやつて來て、中に、一人日本語の能く出來る佛人が居る。彼れは、莞爾に笑ひながら、

「日本床屋さん、豪いことあります。外國床屋、皆逃出しました。貴君、鐵砲彈來る中、髮刈る、鬚剃る、私、感心あります。」

島田「私、鐵砲彈など怖いことありません。日本人皆強い。チャン〳〵の鐵砲彈恐ろしくない。私、頭、彈丸的る、彈き返して了ふ。」

と云つたら、彼等は、「アハヽヽヽ」と、高く笑ひて、それから、「髭を剃つて貰いたい。」

と云ふから、「今此のお人と、其の後、二人ばかり日本人が來る約束だ。それを濟まして後なら、剃つて上げよう。」と答へた。すると、彼れは、「私、一弗上る、其の人の後、直ぐ剃つて呉れる宜しイ。」

と云つて、金を出して見せるから、島田理髮師は、

「へ、ン」と、鼻の先でせゝら笑ひをして、

「そんな金に眼を眩して、先へ約束した人を後へ廻し、恩も義理も無い外國人の云ふことを聞く

やうな、其樣唐變木ア、日本人にア一人も無いのだ。お前さん方は、日頃、外國の床屋へ行く人達で、其の床屋が、弱虫で逃出したから、據所なく、日本の床屋へ來たんでせう。だから、本來は斷つて了いたいけれども、折角來たのだから、一番義侠心を振つて剃つて遣らうと云んだ。強て剃つて、貰いたけりやア、待つて居玉へ。剃賃なんかア、當り前より、一文だつて餘分に貰やアしない。」

と、大氣焰を吐いたので、彼等も大いに閉口し、溫順く待ッて居て剃らしたさうだが、島田も、面倒になつて來たから、手荒くゴリ〱と剃ッたら彼の佛人が、「貴君。痛いことわります。」

と云ふから、島田は笑ひながら、

「痛いなんて、弱いことを云ひ玉ふな。戰爭の中だもの、鐵砲彈が的りアモッと痛い。」

と、尙はゴリ〱剃つたから、彼等も呆れ返つて

「日本床屋さん、豪潔あります。」

と、云つて行つたさうだ。誠に、馬鹿げた話しのやうだが、實際のことで、恁う云ふ氣質の男だから、領事御夫婦も、其の氣性を愛して贔負にして居たさうだが、十七日の夜には、領事館の方でも手不足になつたので、此の男をも呼びにやつて、炊事の手傳迄させることになりました。

濱子婦人は、良人の領事に向ひ、「阿郎。妾しは、胡五に暇を遣した方が、好からうと思ひますが。」

鄭領事「ム、。已も爾う思ふ。今夜、早速に暇を遣んなさい………。然し、支那人としては、珍らしい信義のある男だ。」

濱子夫人「外のボーイは、十五日に、皆、逃出して了つたのに、彼男一人は、此の砲彈の來る中で、良人や妾しへ、忠實に仕へて居るとは、眞實に敬仰

る通り、支那人としては、稀な人で厶います。暇を遣るは惜しいですが、聞けば、彼人も、妻子のある身ださうですから、それで、妾しは、家へ歸らした方が宜しからうと思ひます。

と、是から、胡五を呼出しまして、濱子は、例の如く、莞爾に笑みながら、

「胡五。今、お前を呼んだのは外でもないが………。實はね………、今夜限、お前に暇を遣るから、家へ歸つたが好からう。」

恁う云ふと、胡五は、呆れたる面色にて、暫しは、濱子夫人の顏を見詰めて居りましたが、稍あつて、

胡五「奧樣。何と被仰います。では、私に、暇を遣るから出て行けと、恁う御意遊すので厶いますか。

濱子夫人「ア、、爾うです。

胡五は又、暫し首を傾けて居りましたが、軈て、ハラ〳〵ッと涙を流し、

「ア、情ない………。では、私しが支那人だから、旦那樣や奧樣の御恩に背き、清國兵や義和團へ、內通すると思召して、それで私しに、暇を遣る、と被仰るので厶いませう………。奧樣。それは、お情なう厶います。それは、餘りで厶います。こ、此の胡五を、夫までにお見侮りで厶いますか。」

と、彼れは齒咬を爲し、或は暫時、無言で居りました。

家庭童話良材

五十園德文

一　たまや〳〵（一）

『たまや〳〵、たまや〳〵』と、よびながら、春雄は、あちこちと、猫をさがしてゐましたが、おも

てからはいつて來た、妹のお花に問ひかけて、
春雄『そこらに、たまはゐませんでしてかね。』
お花『あゝ。兄さん、たまはね、今、庭にゐましたよ。あの櫻の木の下で、雀を捕らうとして………。兄さん、たまを、何になさるのです?』
春雄『お母さんがね、猫をつれて來たらば、遠い國のけものゝおはなしをするとおしるのよ。』
春雄は、庭におりて、おひまはつてゐましたが、やがて、猫を抱いて歸つて來て、母の居間に入り、さもうれしさうに、
『お母さん、たまがをりましたよ。つれてまゐりましたよ。
如何におもしろい話を聞かせて下さることかと、春雄、お花の兩人は、母の側にすわるに、母は、猫をとつて、膝の上にだきあげて、かはゆらしさうに、其のいかにも柔かい毛をいく度も〳〵なでおろし、やがて、
『これで、猫の大さをはかつてごらん!』
紐で造つた尺度を、春雄にわたして、春雄は、猫を、机の上にすゑて、お花と共に、母の言のとほりに、之をはかつて見て、其の、鼻さきから、尾の端までが、二尺八寸、丈が九寸であることがわかりました。
母『さあ、また、しづかに、たまを撫でゝごらん!』
春雄とお花とは、母の言にしたがつて、かはる〳〵、猫を撫でゝ、
春『非常に、滑ですね。それで、また、大さうつやもありますね。』
花『ほんに、絹のやうでございますね。』
母『何を、たまが食べるか、知つてゐますか。』
春『知つてゐますとも、私は、たまの、大すきなものを知つてゐます!。さつき、たまは、庭で、

雀を捕らうとしてゐましたよ。けれどもね、たまが、それをねらつて、とびつきさうにした機に、雀は、飛んでにげてしまつたのです。』

花『私は、この間、たまが、いきてゐる鼠を、口にくはへてゐるのを見ました。たまが、一寸、其の鼠をはなして、下におきましたから、これは死んだ鼠かと思ひましたら、其の鼠が、すきを見て、急に、にげ出したのです。けれども、たまがいそいで、手をかけましたので、とうとう鼠は、捕まへられてしまひました。』

春『それから、また、この間、叔母さんの處で、何處かの猫が、椽側にあつたガラスの入物の内から、きれいな金魚を盗み出しました。叔母さんが、それを見つけて、金魚を食ッてゐるのを、ひどくうちましたよ。』

母『お前たちは、今、猫が、鳥や、鼠や、魚などを食べるといひましたね。さあ、他の動物を殺したり、食べたりする動物を、何といひます？』

春『肉食動物！』

花『肉食獸！』

母『猫のからだは、自分の食物をとる爲に、どれほど都合よく出來てゐますか、聞かせて下さい。鳥や、鼠は、ひどく臆病な動物ですから、少しの音でも聞くと、直ぐににげてしまひませう。』

花『猫の手足は、大さうやはらかでございます。その裏は、蒲團を附けたやうになつてをります。それでございますから、少しの音もたてないで歩いたり、走つたりすることが出來るのでございます。

春『猫の手足が、柔ですと。それはをかしい。こゝを御覽なさい。私の手を。』

春雄は、いかにも不審な顏つきで、片手をさし出

しました。見れば、針のさきで引きかいたかと思はれるやうな。ながい、赤いあとが、十文字についてゐました。

母『どうして、そんなにしましした？』

春『たまが、こんなにしましたのです。今、お花が柔いといふ其の手で。………私が、庭で、たまの來たがらないのを、木と木との間から、無理にひき出しましたのです。』

母『猫の手足は、如何にも柔なのです。しかし、爪が、大さう、つよくて、銳いのです。御覽なさい、今は、こんなに、引きこんで、毛の中にかくれてゐますが、つかはうと思ふ時には、何時でも、急に引き出されるやうになつてゐます。』

母は、なほ、言をつゞけて、

『猫の齒は、また、つよくて銳いのです。それで食物を、こまやかに、かみさくことが出來なければならないからです。』

母が、話をしてゐる間に、猫は、春雄の手をなめてゐました。春雄は、急に思ひついたやうに、

『やゝお母さん。たまの舌は、なぜこんなに、ザラ〳〵して粗いのでせうか。』

母『猫の舌には、銳くとがつた、こまかなものが、一面に、幾らとなくついてゐるのですけれど、猫は、殺した動物の骨から、肉を、こまかにへがすことが出來るのでございます。』

雜報

●●●紫雲靉靆

●新嘗祭　去月廿三日、宮中に於ける新嘗祭の

御模樣を承るに、岩倉掌典長、竹屋、宮地、藏田、園池、宗、萩原、久我等各掌典、小谷、菅野、高橋、與謝野、米田等各掌典補、三宮、戸田、木戸、丹羽、山内、稻葉、田中、萬里小路、蜂須賀、伊澤、淺野、松平等各式部官は、廿二日午後二時より出仕、神殿の粧飾神座の御設け等ありて、岩倉掌典長一々檢分、五時四十分、神殿の四隅に忌火の御燈を、又各所に庭燎を點せり。岩倉掌典長、恭しく祝詞を申す前、親王、王、親任官、公爵、從一位、勳一等、一等官、侯爵正二位、二等官、麝香間、錦鷄間祗候、及び、伯爵總代柳澤保惠、子爵總代諏訪忠元、男爵總代菊池武臣等、着床、御供進、御告文等あり。親王以下、宮内省奏任官、係判任官拜禮、右にて、夕の御祭典を終らせられ、當日午前一時より、再び曉御次第の御祭典あり。一同拜禮の上、漸く、午前三時御結了相成れりと承りぬ。當夜參列の重なる人々、左の如し。

閑院宮載仁親王、梨本宮守正王、久邇宮邦彦親王各殿下、田中宮內、山本海軍、芳川遞信、菊池文部、清浦司法各大臣、佐々木、河瀨、中牟田、大島、高崎、岩倉各樞密顧問官、黑木、奧兩都督、長谷川近衛師團長、寺內參謀次長、黑川中將、谷子(勳一等)三宮式部長、近衛、鷹司、二條、嶋津、毛利、三條(公爵)久我(侯爵)松浦(麝香間祗候)船越、松平(錦鷄間祗候)柴田內閣書記官長、中村陸軍、齋藤海軍、波多野司法、大森內務、淺田遞信、岡田文部の各總務長官、以下各省勅任官、伯爵總代伯爵柳澤保惠、子爵總代諏訪忠元、男爵總代男爵菊池武臣等外三十名。

●鎭魂祭御模樣　去月廿三日午後四時より、宮中綾綺殿に於いて、御舉行あらせられたる宮中鎭魂祭の御模樣を聞くに、岩倉掌典長、竹屋、宮地、藏田、園池、宗、萩原、久我等各掌典、小谷、菅野、高橋、與謝野、米田等各掌典補等　齋殿の後、地上東面の場處に着床　奏樂起立の間に神降。安知女の曲を奏し、八代物を供へ、引續き、神饌を供したり。岩倉掌典長は、齋殿に昇りて祝詞を奏し、披座に着く。奏樂中に、各掌典等、絲結の座に着

き、掌典手づから、　天皇、皇后兩陛下、皇太子殿下の御衣御玉緒を、齋殿の案上に奉安し、岩倉掌典長、及び、各掌典等面伏す。掌典長以下、八たび拍手し、內掌典、進んで宇氣槽に昇り、掌典補、齋殿前後の幔を垂れ、掌典、絲結を奉仕す。內掌典、鉾を執つて、宇氣槽を衝くこと十度、畢つて、御玉緒を本の御柳筥に納め、掌典補、前幔を褰げ、掌典、神殿に進み、御衣筥(柳)を執りて蓋を開き、神前に向ひ、振動すること十度、畢りて、奏樂の間に、御衣並に御玉緒入御。茲に、當日の御式を終らせられぬ。當日は、皇太子妃殿下御忌服中につき、同殿下の御衣、御玉緒の渡御は無かりしとぞ。

●・・・・

●酒肴下賜　宮中新嘗祭のため、去る廿二日午後九時過ぎ、夕の御祭典を終り、參拜者に對せられ、酒肴の御下賜あり。一同御饗應に與りて、再び、曉の御祭典に參列せられたる由。

●・・・・・・

●皇后陛下に御對顏　過日、臺灣より御歸京あらせられたる、故北白川宮妃富子殿下には、去月廿三日午後、宮中に御參內、親しく皇后陛下に御對顏あらせられ、臺灣神社御鎭座式の御模樣より、臺南御舊趾、淡水、新竹、蕃民等の狀態など、具さに言上せられけるに、陛下には、非常に御滿悅の御樣子なりしと承はる。

●・・・・・・

●四國行啓御延引　皇太子殿下の四國行啓は、一旦御內定とあり、其の趣を內々御沙汰ありしが、範子殿下御薨去のため、目下、妃殿下の御喪服中なるをもて、御見合せとなり、追て、來春四五月ごろには、行啓仰せ出さるゝならんと漏れ承る。

●・・・・・・

●久邇宮殿下に御賞賜　大元帥陛下、過日宇都宮御駐輦の際、同地東方に於いて、陸軍大學生の作業ありき。その時、久邇宮邦彦王殿下も、學生と

して、騎馬にて、六里程の廣野を御踏査あらせられし後、早くも、三十分を費さずして、略圖、并に、配兵表等を調製せられしが、敵官等、數時間研究の結果と一致せり。陛下御覽じ給ひて、深く御感賞あらせられ、此の程に至り、侍從長を經て、殿下へ左の御沙汰と共に、双眼鏡を賜はりけるとぞ。

拜啓、殿下、過日宇都宮地方に於て、戰術實地作業宜敷との旨、聖上被聞食、御滿足被爲在候。此御品下賜候。將來、益御勵精可被遊樣御沙汰に候。此旨言上に及候。匆々恐惶敬具。

十一月二十六日　　實　則

久邇宮殿下侍史

●久邇宮女王殿下の御降嫁　久邇宮邦彥王殿下御妹、純子女王（十八）には、去る廿七日午後、麻布鳥居阪邸御出門、近衛騎兵一分隊の儀仗にて、牛込坂赤城下なる、舊大和柳本藩主正五位子爵織田秀實氏（二十）の邸に御入輿あらせられたりといふ。當日の儀式は、松岡止波子刀自擔任し、三献膳部は、石井泰次郎氏が、宮中の清美なる古例に稽へて、調進せし由にて、其の要左のごとし。

初献、打數（白縮付師鮑、小土器肆、白土器箸、海月、鹽）〇二献（白平杯紙立松重朋芽紅鯉）〇三献（白平杯紙立梅重白紅鯛）〇酒盞居小衝重、銚子——盛酒、提——盛酒

●北白川宮妃殿下　故能久親王殿下の御靈遷式御參列の爲め、臺灣に赴かせられ、故宮殿下御病臥地たる、臺南迄御巡回あらせられたる妃富子殿下は、去る月十五日、横濱入港の淺間艦にて、御歸京遊せられたりき。殿下の御氣性勝れさせ給ふことは、豫て承り及ぶ所なるが、初め、軍艦淺間にて、横濱を出でさせ給ひてより、基隆御着迄、天候不良にして、海上不穩ありしにも拘はらず、絕えず御機嫌麗はしく、殊に、基隆御着の折は、空一面に搔曇り、港内の波浪險惡にし

て、御迎に參りし兒玉總督の如きは、艦に攀らんとして、端艇波浪に煽られ、痛く脇腹を撃ち、軍醫の治療を受けたる位なれば、艦を淡水港へ廻はさんかとの議さへありしほどなるに、妃殿下には、稍、風浪の靜まりたる間をもて、棧橋より御降さらせ給ふ時、怒濤忽ち艦側に碎けて、御召物の裾を海水に濕すに至りたれども、殿下には、泰然として御氣色常に變らせ給はず、靜に、タンベイ船に移らせ給ひ、大阪商船會社支店樓上にて御召替あらせられたるには、人々、愈々恐れ入り奉りたりとぞ。竹の園生のたふとき御身をもて、いともかしこき御心なんめりかし。

●麴町區へ御下賜金　山階故妃範子殿下御生前の思召に依り、同宮御本邸御所在區たる、麴町區長、丹所啓行を同御本邸に召させられ、近藤家令より、金一千圓を、麴町區慈善事業基金中へ御下賜の旨、傳達せられたりと承りぬ。

●觀菊御會　去月十九日、觀菊御會を催されぬ。天皇陛下は、御風氣の爲め臨幸なきも、皇后陛下は、同日午後二時御出門、略式の鹵簿にて、赤阪離宮へ行啓あらせらる。參列するもの、閑院宮、同妃、小松若宮妃、梨本宮の四殿下を始め奉り、內外の群臣、男女約二千餘名、萩の御茶屋にて御休憩の後、先づ、僊錦閣の背後にある、君の惠、(薄黃)旭鶴(薄紅)等、數百株の菊花より、丘上なる洗心亭前の、小夜衣(赤)佐野の渡(白、赤八百五十輪の赤城、黃七百二十五輪の金鷹等、隈なく御覽畢らせられ、丘上左側なる假立食場にて、御宴を開かせられ、立食場は、橫三十間、奥行十五間の御假屋にて、柱、天井、悉く、菊花菊葉常盤樹にて飾らる。軈て、四時還啓仰出されしが、小雨降りては日影を漏らし、曇りては又霽れたる秋

の空の、午後は、全く晴天ならむと思の外、三時過より、東南の風、俄に吹き起りて、つゞきて大雨さへ到り、凄じき荒模様となれるは、誠に口惜しきことなりとぞ。

●靖國神社再度の設計　九段坂上なる靖國神社は、彼の拜殿造營の當時より、種々の設計ありしも、何分造營工事のみにても、多額の費用を要したるより、中々、數多くの企を一時に完成する事態はずして、遂に、本年は其の儘となり居たるものゝ由なるか、愈々三十五年五月の大祭執行後には、着々、其の設計をつぎ／＼に實行すべしとぞ。さて、其の設計を聞くに、先づ、大鳥居の移轉なるが、こは、故大村大輔の銅像を越して、坂下迄移さんかとの議もありしかど、矢張該像の場所より手前がよからんとの事に決し、鳥居は、兎に角移轉せらるゝが、其の跡には、別格官幣社としての美麗なる表門を造營し、舊競馬場の左右、百間の枳殼垣は、殘らず取拂ひ、高き石垣を築き、其の上に、去る明治十年の戰役、又は、廿七八年の戰役等に、分捕りしたる砲、又は、用ひて廢銃となりたるもの、十餘萬挺存在するを使用し、これを鐵柵として、前記石垣の上に建て列ぬる筈なりといふ。又、該地内には、樹木を多く植ゑ、大に面目を一新して、神々しき天つ御庭に擬ふる企てなるが、此の大鳥居移轉のみにても、費用已に三千圓を要するといへば、全體にては、數萬圓を費すなるべしと、さばれ、慥に大事業にして、二ヶ年餘の日月を要すべきや疑なしといふ。又、先頃もある委員のうちにて、舊競馬場の兩側に、煉瓦造りの家屋を設け、淺草中見世の如き賣店を許可しなば、大に同處も賑ふならんとの議もありしが、素より斯かる事は、たふとき神社に對して、

其の威嚴を損すべしとて卻けられ、自然消滅したりと。尤も千萬の事共あり。因に因す、彼の故大村兵部大輔銅像設置地といふは、舊幕府の歩兵邸跡たりしを、明治三年に至り、朝廷より、特に招魂社を創設したる場處にして、維新の戰死者はみなそこに祀られしが、其の後改築の期來りて、今日の處に移されし次第なるも、大村氏銅像の設置あるに當り、斯くの如き縁故もあればとて、畏くも勅命に依て、其處に銅像を据ゑつけられしものなりとの事なれば、人々疎略に見過すべからざる由。

●紀念の御椅子　故北白川宮能久親王殿下が、去る頃、第六師團長として沖繩縣へ御出張あらせられし時、同縣佐敷郡間切にて、御用に供したる御椅子は、其の後、村役場に保存し置きけるに、先頃、同妃殿下の、間切海軍倉庫内に御休憩遊ばされし折にも、此の御椅子が御用に立ちしより、村民は、前後有り難きこととなりとて、同地佐敷小學校にて、永くこの御椅子を藏し、兩殿下の紀念品となすといふ。

綾羅錦繡

●孝子　大分縣大分郡判田村に孝子あり。名を秦今四郎(二十)と云ひ、今より三年前父を失ひ、母阿千代の外三人の弟あるも、孰れも、幼少にして、今四郎の手扶けとなる者なく、特に、母は、今より十年前、重病に罹り、起臥自由ならず、特に、資產とてもなく、今四郎が日夜勉勵して、僅に得たる金にて一家を支へ、母の看病、弟の世話など、何一つ不自由なき迄に世話するにぞ、近隣其の孝養に感ぜぬ者とてはなし。されど、此くまでの孝子なれど、身の男子なると、末子三人まで、悉

く幼少の男兒なるより、朝夕の食事は素より、衣類萬端に至るまで、悉く、今四郎の手數を煩はさざる可らず、加之ならず、病母の、年中一室に閉籠れるをいたはらんが爲め、春秋の如き氣候暖かなるの日は、鎌鍬などを腰にし、母を背にのせ、遠近の田圃山林に携ふるなど、見る人袖をしぼらぬはなしとぞ。其の他、今四郎の孝養なるは、近隣合壁にて、偶ま茶菓など貰ふことあるも、先づ第一に病母に供し、又、男の身として、時々母が嗜む茶菓子の類を作りて、之れを與へ、その身は、唯の一個さへ口にせざるのみか、如何にもして、今一度以前の健康に復せしめむとて、一厘二厘の小錢を貯へ、軈て三四十錢も貯積せば、直ちに、良藥を求めて服せしむるなど、心根のしほらしさ、今の世には多く聞かざる處なりと云ふ。誠に感ずべき極みにてぞ。

○豐橋の孝行娘　三州豐橋町大字花園町卅六番戶、近藤儀作と云へるは、其の妻との間に、長女つね(十六)と、二女きよ(十三)の二人ありしが、其の後、妻の病死せしより、はつ(三十六)と云ふを、後妻に娶り、夫婦の間に、ゆき(六つ)豐、(四つ)みつ、(二つ)の二女と一男とを產みたりしが、兎角、繼母と繼子の睦しからぬは、世の習ひにて、殊に、後妻つねが、實子三人を擧げしよりは、繼子の、つね、きよ、の兩人には、自然と待遇も惡しくありて、遂に、妹きよは、他へ養女に遣し、夫より後は、繼母の惡みは、つねの一身に集まりしも、つねは、性來柔和なれば、繼母より如何に苛酷の取扱ひを受くるも、少しも、之を苦みと思はざりしのみか、只管、繼母の意を迎へん事にのみ心を碎き居りしが、もと、父の儀作は、日雇ひを業とし、僅に其の日を送る貧しき生計にて、數多き家族の衣食に充つる

餘裕とてあければ、後妻と相談の上、長女つねを、同町字札木の料理屋、千歳樓へ奉公に遣りしに、つねは、繼母に仕へても、斯る孝心深き女なれば、主家に事へても、猶、忠實に働くより、同家にても、甚だ愛せられしが、僅かの間にて、父より主家に、暇を乞ひて、引取りたれば、夫より、又實家に歸りて、實父並に繼母に仕へて、孝道を盡し、自身は、苦められ居るも、其の繼母の產みし三人の子供を愛する事は、親身の兄弟姉妹にも優り、且つ、一家の不如意あるより、實父を助けて事業を勵み、寒暑の別なく勞働を怠らず、世間の普通の娘ならんには、美服を纏ひて、猶、倦かぬ年頃あるに、僅に見苦しき襤褸に肌を蔽ひて、日々農事に從ひ、夜は、同町字本町の辻に、魚を商ひて、家計を補ふなど、とくより、同地にては、孝行娘と稱し居るとぞ。

●唐辛子屋老女の奇特　淺草の仲見世なる唐辛子屋の老女、山口おたみが、十月中旬、金百十圓を、同區內の公私立小學校へ寄附せしかば、區內の私立學校は、其の奇特なる行爲に對して、感謝狀を送るに決し、山の宿山田學校へ、右三十餘校の校長會合し、前教育會長柳澤子を招請し、感謝狀贈與式を擧げ、質素なる茶菓を饗して、おたみの篤志を嘆賞したるに、おたみも非常に滿足したりといふ。猶同人は、昨朝小川學校罹災の趣を聞くや、二人の若者に背負はれて、態々同校に至り、見舞として、金十圓を贈りたるに、同校は、其の厚意を謝し、現金だけは返附したりといふ。前號にも記せしごとく、屢かゝる行をなせしは、今の世に珍しき老媼と謂ふべし。

●孝女の受賞　鹿兒島縣囎唹郡松山村に、士族安藤長右衞門と云ふものあり。目下、川邊郡東加

世田村小湊に寄留し、日雇稼を爲して、貧しき暮を立て居れるが、去る二十九年十二月、妻の某が重病に罹りて、今にも起臥自由ならず、到底快復の見込なく、夫長右衞門の苦心は勿論、そが二人の中に成せる今年十二に成れる阿多茂といへる娘は、母の病氣を幼な心の身に引受けて、勞り盡す朝夕の立働き、大人も及ばぬ殊勝の程、見聞くもの誰れとて感ぜぬものなかりしかば、遂に、公邊に聞えて、同縣知事より、左の賞賜あり。

安藤たも　明治廿三年一月生

資性溫順、志行卓拔、明治廿九年母病に罹り、起臥自由ならざるや、父と共に看護怠らず。爾來、家政益々窮なるに至り、父に勸めて家業を努めしめ、單身看護に從事し、母若し食せざれば、已れ亦食を缺くこと一再ならず、或は、看護の傍、機織の法を習ひ、金を製して母に供する等、年少にして多年の孝養至らざるなし。洵に、奇特とす。仍て、其爲賞金三圓下賜候事。

明治三十四年一月十六日

鹿兒島縣知事正五位勳四等　千頭淸臣

殊に、松山村の有志、凡そ百四十八人醵金して、十五圓九十一錢五厘を少女に與へたりと云へり。德孤ならずとは、斯る事をや云ふなるべし。

東西南北

●風俗改良會の改良事項　風俗改良會が、去十八日の會合に於いて、決定したる改良事項は、今の時弊にあたれるもの多く、即ち、左の如くありといふ。

▲訪問は、午前は九時より十一時、午後は、二時より四時(日の永き季節は五時)に至る迄を通例とす。

▲訪問の際の談話は、冗長に渉らず。時間は、短少なるべし。

▲訪問には名刺を出し、面會せざる時も之を遺し置べし。

▲訪問者には、茶菓を出さゞるを通例とす。

▲業務上の訪問には、餘事を語る可からず。

▲訪問者の名刺は、白色の紙質を用ひ、裝飾を附す可からず。

▲訪問を受けたるときは、勉めて、速かに面會をなし、徒らに、其の人を待たしむることなかるべし。

▲人と對話するに、野卑の言葉を用ひさる樣注意すべし。就中、猥褻の事は堅く之を愼むべし。

▲文章演說對話に於いて、人の氏名を呼捨にせざるを善とす。

▲社會共存の義に由り、他人の妨害をなさゞることを勗むべし。之を例せば、▲道路の通行には左側を通り、人道車道の區別ある場所に在っては、必ず、人道を取るべし。▲途上に於いて、

車馬又は歩行者を追越さんとする時は、必ず、其の右方に出づべし。又、後方より警聲を掛けられ、之を避けんとする時は、必ず、左方に於いてすべし。▲途上に佇立し、立話すべからず。▲途上に出來事ある時、其の場所に雜集し、通行の妨碍をなさゞる樣心掛くべし。▲總て人に接し、又は戸外に出づる時は、見苦しき服裝をなさゞる樣注意すべし。▲途上又は船車中に在りては、容姿を端正にすべし。船車中に在りて、無作法なる態度をなし、座席を廣く横領し、或は、酒宴に似寄りたる事をなし、總て他人の迷惑を省みず、我儘の行爲あるべからず。

▲渡船場乘車場にて、先を爭ひ、混雜せざる樣注意すべし。

▲劇場寄席等にては、極めて靜肅にすべし。多人數集會の席にて、濫りに私語をなし、新聞の音讀等をなす可からず。

▲老幼婦女に對しては、及ぶだけ力を添へ、之を扶助することを忘るべからず。

▲公衆の眼に觸るゝ場所に設置する時計は、努めて、其の時刻を正確にする樣心掛くべし。

▲回答を要する文書に對しては、努めて、速に返事すべし。

▲案内狀は、成るべく、一時間以前に送るを常しとす。

▲酒杯の獻酬を廢止すべし。

▲饗應の飲食物は、其の席に於いて、飲食する者に止め、總て、客人の持還り、又は、其の家に送り屆くる者なきを善しとす。

▲虚飾無用の物品贈與を廢すべし。

▲會葬の際は、愼肅なるを要す。葬儀の節、生花、造花、放鳥等の贈物を爲さゞるを善しとす。會葬者に飲食物を差出し、又は、其の馭者、馬丁、車夫等に、飲食物金錢等を交附せざるを善しとす。

▲旅店、其の他の茶代は、一切廢止せしむる事を勉むべし。

●繪畫共進會褒賞授與式　第十一回繪畫共進會褒賞授與式は、去る月十五日午後一時、上野公園五號館、同會場に於いて擧行したり。會頭二條公爵は、忌服に付き臨席なく、先づ、審査長の報告ありて、會頭代理、副會頭岡倉氏より褒賞を授與し、次で、會頭の祝辭、會員總代木村武山氏の答辭あり。其の日受賞の重なるものは、金牌、寺崎廣業、銀牌、下村觀山、尾竹國觀、富岡永洗、上原古年、中島醴泉、竹内蘆風、銅牌、水野年方外十名、一等褒狀、北上竹次外四十二名、二等褒狀、三浦北峽外七十七名、三等褒狀、岡田幽明外七十六名、褒詞、石川千代子外九名ありしといふ。

●紀念植樹　北海道小樽附近は、追々土地の開くるにつけて、將來、益樹木の必要を感ずべしとて、當局者は、此の程、之を小學奬勵の方法にも利用し　各高等小學校の三年生は、卒業紀念とし

て、一定の地域に、一人一本づゝの赤松、又は、落葉松を植させ、其の道に熟達せる監督者を置き、生徒をして、一年四回の手入をなさしむべき事に定めたりと。

●郵便物表書の注意　東京郵便電信局に於いては、郵便物區分方法に改正を加へ、東京より各地へ發送するものは、從來、專ら郵便物表記の國郡名に基き、仕分を爲し來りしが、改正の方法は、主として府縣名を區分の目標とすることゝなせる由。又、東京市内の配達となるべきものは、從來、主として町名に依り區分せしも、改正の方法は、先づ、行政各區に大區分し、府下各支局に分配し、取扱方を敏捷ならしむる由に付き、郵便物の表書は、地方行きのものにあつては、市郡町村の上に、府縣名、又、東京市内配達に係るものは、區名を明瞭に冠記せざれば、區分上錯雜し、自然遲達を生ずるの恐あるを以つて、差出人各自に於いて、宜しく注意を要すべしとぞ。

●初霜　過日、暴風雨の日本海を過去りたる後、高氣壓は、漸々本州に擴張し、爲めに快晴と爲りたるが、寒氣も其の故に加へり、各地に霜を見るに至れりき。東京に於いては、去る月廿一日午前五時頃の最低温度は、今年に入り、初めての寒氣にて、攝氏一度四分、地温同氷點以下四分八を示す。即ち、初めて霜を結び、薄氷張りたり。之を例年に比するに十二日遲く、昨年より三日遲れたりと。

●最年長の王族　丁抹國は、歐洲主權者中の最年長者なれども、王族中の最年長者は、王の姉なる、アンハルトベルブルグ公爵夫人なり。夫人は、去月中旬、九十二歳の誕生日を迎へられたる由。夫人は、二十三歳の時に結婚せられて後、間もなく、アンハルト公爵は、精神病に罹られたるが、

千八百六十三年に、公の薨去せらるゝまで、夫人は、攝政の職に在りて、頗る、聰明の聞えありたりといふ。

●三百呎の海蛇　此の程、紐育の沖合に、長さ三百呎以上あるべしと思はるゝ海蛇現れ、長き角と、赤き眼とを有したる由にて、附近に浮遊し居りたる快艇の乘員、及び、海岸にて之を見たる人々等は、孰れも甚く喫驚したるが、暫くして、水中に沈み、其の行衛を見失ひたりと云ふ。

●女子は高等教育に適するか　十月十二日伯林に於いて、所謂、進歩主義の女子の大會催され、女子は、高等教育を授くることを可とする旨決議したりき。然るに、現時、獨逸に於ける學者一般の説は、女子に高等教育を授くることを不可とする由にて、生理學の大家なる、ライプシッヒ大學教授、モビアスが、此の程、著はしたる「女子の生理的無氣力」と題する書の如きは、此の問題に關して、大に參考すべきものなりと云ふ。其の書に曰く、女子は、男子と小兒との中間に位すべきものにして、女子の智能は、創造的なるよりも、寧ろ收容的にして、起原的なるよりも、寧ろ摸倣的なり。又、女子は、人智の發達に、曾て一も貢獻したる所なし。女子の專業と稱すべき、料理裁縫等の事に至るまで、新方法を案出したる者は、悉く男子なり。女子に高等教育を授くるは、頗る危險なることにして、其の結果は、疾病を増加し、多くの石胎を生じ、女子の本能を、却て痴鈍ならしむ云々といへりとぞ。

●太陽の色と大氣の色　普通の人は、太陽の色を、橙黄色、大氣の色を、青きものと信じ居れる如くなれども、近來、科學者の稱する所に據れば、全く、其の反對にして、太陽は青色、大氣は

橙紅色なりといふ。

●蟻の生活は人に似たり　米國のホウイーラ敎授、及び、ロングの二人が、多年、蟻の生活に就きて、觀察したる所に據れば、蟻も、人類に似たる生活ある所ある由にて、メキシコに產するユシトンと稱する蟻の如きは、常に、異種類の蟻と鬪爭し、其の巢を襲ひ、其の卵を掠奪し、又時としては、地中に棲息する甲端の族を獵する事ありて、其の獲物を、數月間、巢の中の食物室に貯へ置くと云ふ。

●黑奴の小兒の暗算　黑奴を敎育したる一英人の言に據れば、黑奴の小兒は、極めて、暗算に巧みなる由にて、問題を言ひ終るとき、直に答へを與へ、其の早きこと、到底考ふるの暇なき程にして、白人の小兒には及ぶものなしと云ふ。

●身の長八呎の人　目下、米國のリーフに居住する、ウイルキンと云ふは、千八百二十四年、ミンネソタ州の、セイントホールに生れたるものあるが、身の長八呎二吋、腰廻り六十六吋、体量四十四貫七百二十匁あり。十歲の時、身長已に六尺に接したりしとぞ。

●諾威人の勤儉　最近の調査に據れば、諾威人の所得額は、男女小兒を混じて、一人、平均年百五十圓なり。又、同國には、五千六百人につき、一の貯金銀行を有し、二人八の中に、一人の貯金人ある割合にて、其の平均、貯金高は、五十圓なりと云ふ。

●米國鐵道の盛況　米國鐵道の總哩數は、十九萬三千哩、機關車は、すべて三萬八千輛、客車及び貨車の數は、百五十萬輛に近し。鐵道工夫の數は、每百哩につき、五百二十九人、工夫の賃銀は、昨年間、凡そ十一億六千萬圓を支拂ひき。諸鐵道

會社の總資本金額は、二百二十九億八千二百六萬七千九百二十圓にして、利益配當は、平均五分半あるよし。

●歐米諸國電話架設者の割合●●●●●●●●●●● ロンドンにては、六十戸につき、一個の電話器を有する割合にて、諸國中、その所有者の、もつとも少なきものなりとぞ。ニーヨークにては、十二戸に一個の電話器を有し、サンフランシスコにては、四戸に一個、ボストンにては、六戸に一個を有せりといふ。

●コロンバスと米國發見の起因●●●●●●●● 在パリ米國大使館附一等書記官、ヘンリー、ゲヴィノー氏は、このほど、コロンバスの米國發見に關する一書を著したるが、それによれば、コロンバスが、科學的先見によりて、米國を發見したるなりと、世人に信ぜられをるが、そはあやまりある由にて、コロムバスは、他の航海者より得たる知識により、新世界のあることを確信したるありとぞ。又、コロンバスに關する多くの記錄は、有名なる天文學者、トスカネリーによりて、稗史的につくられたるものにして、事實にたがへるところ、極めて多きよし。

●馬力と人力との比較●●●●●●●● 普通の人が、綱を肩にのせ、平地において、荷物を曳くときは、馬の六分の一の仕事をなしうる由なり。また、高きところに物を運ぶには、一日に、一噸の重きものを、千呎の高さにはこぶと。同一の仕事即ち、馬の五分の一の仕事をなしうるなり。かくて、人の平均の體量は、馬の十分の一なるを以つて、體量によりて比較するときは、人は馬にくらべて、二倍の力を有する割なりとぞ。

●犬を衛生隊に使用す●●●●●● 英國にては、犬を衛生隊に使用せんとして、現に、實驗中なるが、戰地

にありて、負傷兵にすぐさま醫藥をはこぶには、犬を使用すること、極めて、便利なる由。

●海中寫眞の發明　ロシヤのバルチック海艦隊に屬する一海軍々醫は、多年、海中寫眞の實驗をなし居たるが、遂に成功して、いかほど深き海中の寫眞をも、うつしうるに至れりといふ。發明者は、海中にありて、水壓にたへうるランプをつくることに於いて、はじめ、大に苦心したりしが、この困難は、テシボフといふ人の發明によりて、全く除去せられし由。

●固形空氣を造る　一外字新聞の報によれば、チユフン大學のメッツ教授は、固形空氣をつくることに於いて、成功したる由なり。その空氣は、十五分時間、大氣中にありて、固形を保ちうべく、槌を以つて、之をうつときは、護謨のごとく、はねかへる力を有す。この物は、甚しく寒冷にして、指をだにふるゝ能はざる程なる由。

●英國所有の船舶總數　昨年の調査によれば、英國の船舶總數は、一萬九千九百八十二隻、其の噸數、一千四百萬噸にして、内、滊船は、九千二百九隻なりとぞ。又、昨年中、同國より、他國へ賣渡したる數は、すべて三百隻にして、六十萬噸にて、その内軍艦は、二十隻なりといふ。

●經濟的石炭燃燒器の發明　石炭は、燃燒の際、過半、空費せらるゝものにして、歐州諸國にては、その經濟的燃燒法につき、工夫中なるが、このほど、一獨逸人は、つひに、その方法を發明せる由。この方法は、爐に、一種の器械をすゑつくるにありて、石炭の二割五分を減じうべく、煙は、ことごとく之を消費うるものなり。その費用は、きはめて僅少なれば、ドイツの諸工場にては、すでに、之を應用したるもの多く、海軍にも使用する筈にて、

成蹟、すこぶる良好なりければ、同器械製造所は、あふるゝばかりの注文をうけ居れりといふ。

●二千圓の古郵便切手　古郵便切手は、このごろは、ます〳〵減少して、之をもとむる人は、いよ〳〵增し加ふるのみありしかば、自然の勢として、その價の高くあるは、敢て、怪しむにたらざれども、いぬる頃、ロンドンのブチック、及び、シュプリン商會に於いて、競賣に附せられたる一枚の古郵便切手は、二千二百七十圓なりといふ驚くべき高價にうられたる由。

●マッキンレイ自筆の價　去る十月卅日、紐育第五街の競賣塲に於いて、故、マッキンレイの自筆競賣に附せられたり。こは、寫眞の上に、ウィルリアム、マッキンレイ自署、としたるものに過ぎざりしが、遂に、十三圓にて、ジョージ、スミスと云ふ人の手に買取られたる由なり。米國大統領の自筆にして、斯かる價を有するもの、今は他になしと稱せられけるとぞ。

●英國皇族の嗜好　英國皇帝は、變りたる杖を好まれ、種々の杖を集め居らるゝも、自から、杖を携帶せらるゝときは、質素あるものを用ゐらると。皇后は、扇、及び、鼻烟草入を好まれ、夥多の珍らしきものを所持せられ、皇太子は、古郵便切手を聚集し居らるゝとぞ。

●倫敦貧民工塲の在塲者　目下、倫敦、ホマートンの貧民工塲に於いて、救助を受け居るものゝ數は、總て、四百一人あるが、其の內、二百九十八人は、六十五歲以上のものにして、八十歲より、九十歲までのもの、四十四人、七十歲より、八十歲までのもの、百四十一人、六十五歲より、七十歲までのもの、百十三人なり。又、其の內に、ジョージ三世の代(現帝まで五代)に、生れたるもの、

男子十七人、女子十九人あり。最も、長く同工場に於いて、生活したるものは、三人の男子と、三人の女子とにして、孰れも、入場以來、三十二年を經過せる由。

●電話の使用時間を測る器械　従來、電話は、瓦斯及び、電氣の如く、使用時間の多寡を測る能はざりしが、濠洲シドニーの、バレットと云ふ人は、此の程、此の器械を發明して、専賣權を得たる由にて、今後、電話の加入者は、公平に其の價を徴せらるゝことを得べしと。此の器械は、時計に似たる構造を有し、電話器に聯結せらるゝものにして、電話を使用し居る間は、回轉し、電話を休止すると同時に、休止し、明瞭に、使用時間を示すものなりといふ。

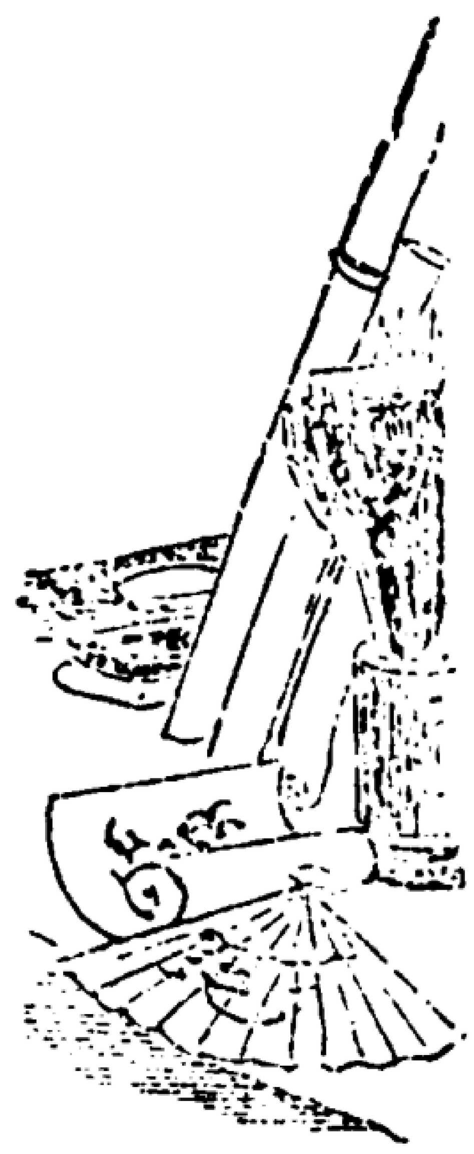
●コーカサスのトンネル　露京發の報に據れば、同地の技師間には、コーカサス山に、トンネルを鑿たんとの計畫あり。其の全長は、廿三哩、工費は、七千五百萬弗なるべしとの事なるが、多分、西比利亞鐵道完成の上は、直ちに、工事に着手せらるべく、此のトンネルは、軍事上、通商上、露國に、莫大なる利益を與ふべしと。

巻頭の題辭書につきて

巻頭、月與高人本有期云々の文字は、支那女界當代の才媛、芝瑛女史の書にして、三輪田刀自の所藏に係るものなり。世界各國婦人の特色は、今や、進みて、支那婦人の特色を紹介せり。この際に、斯の筆、大に讀者諸媛の翹望に合せることを信ず。この作の佳にして筆力の雄健なるは、また、贅するを要せざるべし。船木の大神、高橋松亭氏の作については、師岡須賀子女史の大神の御稜威を委曲に物せられたるものなれど、紙數の都合にて、次號に掲ぐ

ることゝしたれば、諒せられよかし。岡倉秋水氏の裁斷に至りては、可憐の兄弟、時に、或は衝突あきこと能はず。かゝるときに、もし、慈母溫嫗にして、その裁斷を誤らむか。終生拭ふべからざる惡感化を與ふることあるべし。白髮の嫗、なは、機に上りて其の業にいそしむ折柄、愛孫雀の死したるをその兄の殺せりとわやまり信じて、之を訴へき。嫗、なは、この機を下りず、和容溫言、兄のためにその寃を解くところ、讀者諸媛小生の亀鑑たらむ。

●落葉籠につきて、本號も、紙數の都合によりて休揭せり。



明治三十五年月並兼題

一月五日　十二月廿四日締切
歌、海邊鶴
文、新年の詞

一月廿日　一月九日締切
歌、梅薫風
文、遺失物をかへしやる文

二月五日　一月廿四日締切
歌、山霞
文、紅梅を乞ふ文

二月廿日　二月九日締切
歌、朝鶯
文、餘寒見舞の文

三月五日　二月廿四日締切
歌、故郷柳
文、希望

三月廿日　三月九日締切
歌、夜春雨
文、學校の樣子を問ひ合されしに答ふる文

四月五日　三月廿四日締切
歌、行路蕨
文、花見日記

四月廿日　四月九日締切
歌、月前花

文、葦の花を友に送る文
五月五日　四月廿四日締切
歌、鏡
文、暮春の感
五月廿日　五月九日締切
歌、新樹
文、出産を賀する文
六月五日　五月廿四日締切
歌、窓螢
文、郭公をきゝて
六月廿日　六月九日締切
歌、閑居水雞
文、不幸の人を慰むる文
七月五日　六月廿四日締切
歌、夕立
文、人の新盆を弔ふ文
七月廿日　七月九日締切
歌、夏旅
文、夏の朝
八月五日　七月廿四日締切
歌、筆
文、虫干の記
八月廿日　八月九日締切
歌、野草花

文、雲月花の優劣を問はれしに答ふる文
九月五日　八月廿四日締切
歌、名所月
文、郊外散歩
九月廿日　九月九日締切
歌、夕鹿
文、弟を誡むる文
十月五日　九月廿四日締切
歌、菊盛久
文、栗拾ひに誘ふ文
十月廿日　十月九日締切
歌、友
文、月下の讀書
十一月五日　十月廿四日締切
歌、谷落葉
文、紅葉のたよりを故郷につげやる文
十一月廿日　十一月九日締切
歌、水鳥
文、殘菊
十二月五日　十一月廿四日締切
歌、竹間霰
文、入營する新兵の母におくる文
十二月廿日　十二月九日締切
歌、雪中興
文、榾取

新刊發賣廣告

福羽美静大人序文　指原乙子女史編纂
下田義天類大人校定

女子文章軌範

全一册
和装美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内荻子等の傑作中に就き其の最も精を抜き粋を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

株式會社 國光社

明治二十四年十二月五日發行　每月二回五日廿日發行　明治廿五年三月十二日
女鑑
第貳百四拾貳號　第三種郵便物認可

東京築地二丁目株式會社□□社印刷部印刷